

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Introduction to The Linguistic Atlas of Japan : Interpretation of the Maps Vol.1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001551

日 本 言 語 地 図 解 説

— 各図の説明 1 —

国 立 国 語 研 究 所

1 9 6 6

まえがき

各分布地図は、各調査項目に関する地理的な言語差の展望をおもな目的としている。したがって、この説明でも、各分布地図を理解するための作図の基準、凡例の補足的説明、地図の注目点、その他の参考事項などを簡単に述べた。各項目を調査した際に用いた質問文は、各分布地図の左下の欄に示してあるので、原則として、説明では触れない。説明の中で、語形を表わす場合、とくに音声の詳細を示す必要のあるもののほかは、凡例にかかげたローマ字表記を用いた。また、それらの語形のいくつかを同類と認め一括して示す場合は、カタカナで表記した。

資料の整理、地図の編集に関する総合的な解説は、機会を改めて示すつもりであるが、そのあらまは、別冊「日本語地図解説——方法——」31ページ以下を見られたい。

この第1集では、音声・形容詞などに関する項目をとりあげた。第2集は動詞に関する項目、第3集以下は名詞に関する項目をとりあげる予定である。

なお、各分布地図をいっそう深く理解するには、見出し語形の各地点での具体的な内容や、各語形に加えられた注記を記録した「日本語地図資料」(国立国語研究所に保存してある)を参照することが必要となろう。また、語の歴史を推定するにあたっては、文献資料とのつき合わせも必要となろうが、今回は触れなかった。いくつかの項目についての徹底的な言語地理学的解釈は、機会を改めて公表したいと思う。読者も同様な解釈を試みられるよう期待する。

徳川宗賢

加藤正信

「日本語地図」第1集編集・作図・資料整理の関係者

国立国語研究所方言語研究室

上村幸雄(室長) 徳川宗賢 加藤正信 W・A・グロータース(非常勤)

白沢宏枝(研究補助員) 芥川豊子(同)

このほか、研究所以外の方々にも協力していただいた。お願いした仕事の内容や量はそれぞれ違うけれども、以下2段に列記して(各五十音順)感謝の意を表する(後半の8人は高校生の方々である)。

市川 詔子	井上 史雄	岩淵 匡	鏡味 明克	加藤 貞子
亀下 ヒロ子	菊池 和子	小池 朋子	後藤 和彦	小林 豊子
高田 誠	野崎 洋子			

小川 りり子	川合 君代	川合 正子	菊見 恵子	菊見 洋子
白井 千鶴子	鈴木 研二	堀田 優子		

目 次

音声項目全体について	1
1. カガミ(鏡)の -G- の音 2. カゲ(蔭)の -G- の音	1
3. カジ(火事)の KA- の音 4. スイカ(西瓜)の -KA の音	2
5. ガンジツ(元日)の GA- の音 6. ショオガツ(正月)の -GA- の音	2
7. セナカ(背中)の SE- の音 8. アセ(汗)の -SE の音	3
9. ゼイキン(税金)の ZEI- の音 10. カゼ(風)の -ZE の音	3
11. ヒガシ(東)の HI- の音 12. ヒゲ(鬚)の HI- の音	4
13. ヒガシ(東)の -SI の音 14. シチガツ(七月)の SI- の音	5
15. カジ(火事)の -ZI の音	6
16. シチガツ(七月)の -TI- の音	6
形容詞項目全体について	7
17. おおきい(大きい)	8
18. おおきい(大きい)―オオキイ類の詳細図―	9
19. おおきい(大きい)―デカイ・イカイ類の詳細図―	9
20. ふとい(太い)	10
21. あらい(粗い)	10
22. ちいさい(小さい)	11
23. ちいさい(小さい)―チイサイ類の詳細図―	12
24. ほそい(細い)	13
25. こまかい(細かい)	13
26. しかくい(四角い)	14
27. きいろい(黄色い)	15
28. あかい(赤い)	16
29. アカイを“明かるい”の意味で使うか	17
30. まぶしい(眩しい)―前部分―	17
31. まぶしい(眩しい)―後部分―	18
32. くすぐったい(擦ったい)―前部分―	18
33. くすぐったい(擦ったい)―後部分―	20
34. きなくさい(きな臭い)―前部分―	20
35. きなくさい(きな臭い)―後部分―	21
36. こげくさい(焦げ臭い)	22
37. あまい(甘い)	22

38. <塩味が>うすい	23
39. しおからい(鹹い)	24
40. からい(辛い)	24
41. すっぱい(酸っぱい)	25
42. おそろしい(恐ろしい)	26
43. コワイを“恐ろしい”の意味で使うか	26
44. コワイを“疲れた”の意味で使うか	27
45. いい<天気だ>	27
46. <いい天気>だ	28
47. <虹が>きれいだ	28
48. きれいに<掃除する>	29
49. いくつ(個数)	29
50. いくら(値段)	30

音声項目全体について

- ▶ここで言う音声項目とは、特定の単語に現われる特定の音声を、具体的に観察した調査項目をさす。したがって、この結果を、すぐさまその音声の普遍的な法則の分布と見なすことは控えなければならない。また、これは純粋な音声の記録であって、必ずしも音韻論的な区別を調査したものではない。しかし、しるされた音声は、普遍的な音声の法則を、また、音韻論的な区別を反映していると見なされる場合もある。
- ▶音声項目は全部で13あり、それぞれ1か所ずつ注目点があった。その結果は、第1図から第12図までと、第14図の計13面に示してある。そのほか、各項目について、注目点以外の音声に関しても、すべて分布地図を作成してみたが、今回は、そのうちの3面、すな

わち、第13・15・16図だけを公表する。別に、一般項目中にも、これらに準じた音声現象の分布を反映しているものがいくつかあるから、併せて見られたい。

- ▶音声項目は、一定の語形について調査する必要があるため、その語形が、その土地では生活語として使われず、標準語的、文章語的にしか使用されないものでも、平等に採録して地図に示した。これら標準語的、文章語的であるなどの注記は、研究所に保存されている「日本語地図資料」に記録してある。
- ▶音声項目はすべて第5年度調査から追加されたものであるため、調査地点数は2,400ではなく、ほぼ1,000地点である。

1. カガミ(鏡)の-G-の音

2. カゲ(蔭)の-G-の音

両図とも、母音間の-G-に注目した。巨視的には、中国地方から西に破裂音の[g]が分布し、近畿地方から東は鼻音の[ŋ]が分布すると言えるが、愛知・三重の一带、山形の一部から新潟の大部分・群馬・埼玉・千葉・伊豆諸島を貫く地帯には破裂音の[g]または摩擦音の[ɣ]が分布する。微視的には、九州・四国・近畿内部にも例外がある。

この分布は、国語調査委員会「音韻分布図」25図(明治38年)と比較すると、大体一致するが、三重・兵庫北部・伊豆半島西部・山形西部などに[g]が見られること、滋賀・岐阜・千葉北部・九州の島嶼部などに[ŋ]がある点、若干の相違もある。国語調査委員会のものは通信調査によったため、詳しい音声は不明であったが、この図は臨地調査によるものであるから、山形の一部・新潟北部・紀伊半島山地・淡路島・四国・五島・種子島に、有声破裂音の直前に軽い鼻音を伴う[~g]の類が発見されている。これは、直前が鼻母音になる[~g]と、直前の母音との間に軽い鼻音の入る[^hg]の二通りの表記をまとめて示したものである。[~g]の類は、[~d][~b]などととともに、国語史上、中央日本語の古い発音とされ

ている。なお[~dz]については、10図「カゼ」に示した。

28図「赤い」によれば、母音間の-K-が有声音[g]であるのは、北海道南部から新潟北部・東関東にかけての広い地帯、それに新潟長野県境・薩摩半島南部などであるが、これらの地域は、この図で-G-が[ŋ]または[~g]であるから、-K-と-G-とが、音声的に紛れることはない。

この図では、[g]と区別して、摩擦音の[ɣ]を示したが、じつは、[g]と表記したものの中にも、精密表記すれば[ɣ]のものが含まれているかも知れない。また、摩擦しながら鼻にぬける[ɣ̃]も、[ŋ]と区別して示したが、同様に、[ŋ]と表記してある中に、精密表記すれば[ɣ̃]のものが含まれているかも知れない。なお、東北地方などに[~ŋ]の表記がかなり認められたが、[ŋ]との区別が実際には難しいと思われるので、図では[ŋ]に含めて示した。

1図「カガミ」では、沖縄について、カガンという語形で得られた-G-を示した。また、2図「カゲ」では全国のかんりの地点で、カゲボオシで代表されるカゲ〜という複合語形を得たが、これらもカゲと同列に扱った。

1図「カガミ」と2図「カゲ」を地点ごとにこまかく対比してみると、とくに[ŋ]と[g]の境界地帯や、[~g]の分布する地方において、若干の相違が見られる。「ヒガ

シ」「ヒゲ」の-G-について作図したもの(印刷では割愛)と比較すると、これらも全国的分布の大略は「カガミ」「カゲ」と一致し、相違する地点の程度も、ほぼ同じくらいであることがわかった。各図間に見られる若干の相違は、語による差、アクセントの差、調査時の発音の不安定性などが原因かと思われる。これら4語のうち、「カガミ」と「ヒガシ」、「カゲ」と「ヒゲ」の分布が特に類似しているとは言えないから、1図「カガミ」と2図「カゲ」の相違は、後続母音の差とは考えにくい。

なお、母音間の-G-の例は、別に「ショオガツ」「シチガツ」の場合もあるが、事情がすこし異なっており、6図の説明で触れる。語頭のG-の音については、5図の説明で触れる。

3. カジ(火事)の KA-の音

4. スイカ(西瓜)の-KAの音

3図は語頭、4図は語頭以外の、ともに歴史的かなづかいの「くわ」にあたる音について作図した。共通語と同じ[kɑ]と、唇音のはいった[kwa]とに分けたが、後者には[kɑ][k^wɑ]の表記、および、わずかに[w]の音があるなどの注記のあるものも含まれている。これらは、おそらく「家事」などの[kɑ]と音韻論的に区別されるものと思われるが、調査のさい確かめてあるとは限らないので、触れないでおく。

[kwa]は歴史的かなづかいかでも知られるとおり、古典によって知られる中央日本語の古い発音であって、現在も辺境の地に残っているほか、京都・奈良・大阪などでも、かなり根強いことがわかる。もっとも、関東を中心に分布している[kɑ]などは、あるいは、昔から[kɑ]のままであったものかも知れない。

3図「カジ」のKA-の分布は、国語調査委員会「音韻分布図」27図(明治38年)とよく似ているが、岩手・佐渡・若狭・和歌山などに相違が見られる。

なお、沖縄では、「火事だ」は[çi:do:i](火だよ)などの形で現われるため、この項目によってKA-にあたる音の分布を知ることはできない。

4図「スイカ」の-KAは「カジ」に比べると唇音の[kwa]の勢力が弱い。母音に続くという環境の違いもあろうし、また、語による違いもあったかと思われる。なお、東北地方ではスイガンという語形の場合が多かった。

4図だけに関係するが、母音の直後の-K-が有声音[g]に発音される地域が、東北・新潟北部・茨城・九州南端に分布している。この分布は、28図「赤い」の-K-にあたる部分が有声音[g]である地域に比べると勢力が弱く、とくに、福島・宮城ではそれが著しい。これは、AKAIとちがって-K-の直前が[i]のようなせまい母音であることと関係があるかも知れない(16図とも比較せよ)。

なお、「スイカ」のSUI-の部分にあたる諸形は図示しなかったが、大略つぎのようである。[ji:]山形・岡山・広島・佐賀・長崎・熊本・奄美・沖縄。[si]青森。[sïe]島根。[se:]新潟。[süe]東北各地。[su]鹿児島。

5. ガンジツ(元日)の GA-の音

6. ショオガツ(正月)の-GA-の音

5図は語頭、6図は語頭以外の、ともに歴史的かなづかいの「ぐわ」にあたる音について作図した。[gɑ][ŋɑ]と唇音の入った[gwa][ŋwa]の分類、音韻論的な区別などについては、3図・4図と同様に扱った。分布の様相は、3図・4図と平行的である。

5図の「ガンジツ」と6図「ショオガツ」を比べると、語頭である前者において[gwa]の勢力が強い点、KAの場合とよく似ている。ただし、音声的環境だけでなく、やはり、各語の歴史的事情も考慮しなければならない。

5図「ガンジツ」では、宮城・岩手にわずかに見られるガンニチ、各地に散在するガンタンや、また、語頭ではないが、群馬・埼玉に5地点あるオガンジツにおけるGAも含めて作図した。沖縄および、全国各地の「別語形」は、ほとんどツイタチ、オツイタチなどである(元日をショオガツと答えた例もあった)。

6図「ショオガツ」の-GA-は、全国に点在するイチガツも含めて作図した。「別語形」は、岩手・宮城・和歌山などのショオゲツ、イチゲツである。この6図「ショオガツ」において、群馬に[gwa]の目立った分布が現われ注目される(調査の録音で確かめた)。同県で、「ガンジツ」については、わずかに2地点に[gwa]が認められ、しかも、ともに[ogwandzitsus]という語形であった。また、「シチガツ」の-GA-の分布図(印刷では割愛)では、[gwa]はなくすべて[ga]であった。これらの事実を参考にすると、群馬で「ショオガツ」に[gwa]の目

立った分布の現われるのは、前の母音 [o] の唇の丸めが-GA-に残って若干 [g^wa] のようにきこえるのかもしれない。したがって、この場合/ga/との音韻論的な区別があるかどうかは疑わしい。

最後に、5図・6図のGが鼻音かどうかについて触れる。5図「ガンジツ」では、語頭にもかかわらず、徳島・愛知その他に若干の [ŋ] が分布して珍しい。6図「シヨオガツ」では、1図「カガミ」と比べて、秋田・福島・近畿・四国などで、鼻音の勢力がやや弱くなっている。これは、「シヨオ」と「ガツ」の間に語構成上切れ目があり、鼻音になりにくい事情があるのであろう。「シチガツ」の-G-の分布(印刷では割愛)でも、6図とほぼ同じ結果が現われた。

7. セナカ(背中)の SE-の音

8. アセ(汗)の-SEの音

7図は語頭、8図は語頭以外の SE について、とくにその子音が口蓋化音であるかどうか注目して作図した。両図とも非常によく似ていて、語頭とそれ以外という音声的環境や、語による差などは、ほとんどないと認められる。

非口蓋化音のうち、共通語と同じ [se] は全国的に分布しているが、高知に歯・歯茎摩擦音の [θe] のあることが注目される。

硬口蓋摩擦音の [ʃe] は、中世の中央日本語の発音と言われているが、東北・北陸・岐阜北部・四国・九州などの辺地のほか、近畿地方にもかなり勢力が認められる。三宅島の [i] も、同じ系統かも知れない。8図「アセ」の場合、奄美・沖縄に [i] [si] [sɪ] の現われることは、本土の [e] に [i] [i] が対応する母音の事情と関係があろう。

ここでは、[e] の類と別に [ʃe] の類を区別したが、これは、[e] ほど完全な口蓋化音ではなく、[s] が若干口蓋化した程度の音として扱った。ただし、[e] の表記が実際は [ʃe] の程度のものを含んでいる可能性もあって、[e] と [ʃe] は地図では一応分けたものの、両者の実際の音声の範囲は一部分重なり合っているかもしれない。

[ʃe] の類の中には、[e] より少し後方の口蓋で摩擦

する [ʃe] と、それよりさらに後ろの口蓋で摩擦する [ʒe] とを一括して含めた。[ʃe] は宮城・山形中部・新潟に見られ、[ʒe] は青森・秋田・山形北部に見られたが、音の性質が連続的で、はっきり二分して地図に明示することは控えざるを得なかった。別に、さらに奥の喉頭で調音される [he] ([xe] の表記は見あたらなかったが、実際にはこのような軟口蓋音も含まれているかも知れない)があり、[ʃe] の分布する近く、すなわち、北海道・東北・新潟・石川などに散在している。また、山形には [Φe] が若干見られた。これらの [he] や [Φe] は、共通語の HE に対応する音と区別がないものと思われる。

なお、7図「セナカ」の場合、地図に SE-の音を示したものの中には、中国地方の大部分・四国の一部でセナ、全国とところどころでセという語形によって得られたものを含む。また、「別語形」としたものの内容は、奄美・沖縄では、ほとんど全地点でクシ(コシに対応する)、ナガニなどであった。

9. ゼイキン(税金)の ZEI-の音

10. カゼ(風)の-ZEの音

9図は語頭、10図は語頭以外の ZE の音、とくに子音が口蓋化音であるかどうかを第一に注目して作図した。非口蓋化音対口蓋化音の分布は7図・8図の SE の場合に平行しており、さらに SE で [ʃe] の現われる地域は、ここでも口蓋化音が現われ、SE で [he] の現われる地域は、ここでも非口蓋化音が普通であるという点までも一致している。また、沖縄・三宅島などの母音も共通する。9図・10図のうち、とくに10図が7図・8図と似ている。

沖縄では「税金」をジョオノオとしか言わないため、この語について ZEI-の音の調査はできなかった。岩手・秋田・山形・茨城・富山・石川・福井・島根でもジョオノオを普通に使い、また、岩手・宮城ではオサメ、青森ではキップと言い、ゼイキンは改まったことばであるとの注記がかなりあった。これらの地域では、10図「カゼ」の場合に口蓋化音でも、9図「ゼイキン」の場合は、共通語と同じ非口蓋化音であるという地点が多い。これは、ゼイキンが共通語からの借用であるためと考えられる。

これらの図では、子音が摩擦音か破擦音かの区別も、いちおう示した。符号としては、丸と三角を与えた。[dz] [dʒ] (水滴の符号を与えたもの)は、両者の中間の音を精密に示したものと、カナ表記のもの(すなわち、[z] [dz] [dz] [ʒ] [dʒ] [dʒ]がありうる)とを含んでいる。このような事情から、この図における摩擦音と破擦音の区別は、正確なものとは言いが、巨視的に見れば、東日本と山陰に破擦音が多く、西日本に摩擦音の多い傾向が読みとれる。西関東から中部地方にかけて、「ゼイキン」では破擦音、「カゼ」では摩擦音が現われるところが多いのは、語頭と語中という環境の相違が作用したものと考えられる。東北地方では、語頭かどうかにかかわらず破擦音が多い。これは、次にのべる有声音の直前に鼻音を伴うことと関係がある。

10 図「カゼ」では、Zの直前に軽い鼻音の入るものを、色や形に関係なくぬりつぶし符号によって示した。これは、新潟北部・福島西部・宮城から北の東北地方一帯と、紀伊半島の山地に分布する。厳密に言えば、この音声には、直前の母音が鼻音化する[kādze]と、直前の母音との間に軽い鼻音のはいる[kaⁿdze]の二通りを区別することができよう。しかし、図ではまとめて[~dze]で示した。これは1 図・2 図の[~g]の場合と平行する。

9 図では、母音の部分で[eɪ]のように二重母音で発音する地点を、色や形に関係なくぬりつぶし符号で示した。この分布は、国語調査委員会「音韻分布図」6 図(明治38年)と比較すると大局的には一致するが、こまかくは、いろいろの差が見られる。また、短音に発音される地点がわずかながら見られた。沖縄の[dzai] [(d)ɹai]は[dze:] [(d)ɹe:]が誤って回帰したものであろう。

なお、7 図・8 図の内容も含めて、以上のべた口蓋化音[je] [se] [dse]、直前に鼻音を伴う[~dz] [~dʒ]、二重母音[eɪ]などは、すべて中世の中央日本語の発音と言われており、いずれも辺境の地に分布していることがわかる。また、[je] [se]や[eɪ]は、京都・大阪などで新しい音に対してまだかなり強い抵抗を示していることがわかる。とくに、[je] [se] [dse]の分布は、3~6 図の[kwa] [gwa]の分布と共通性が認められ、何らかの関連を想像させる。

11. ヒガシ(東)のHI-の音

12. ヒゲ(鬚)のHI-の音

両図とも、凡例欄には、左右に子音の違い(色で示す)、上下に母音の違い(形で示す)を表わすよう配置した。

両図とも、概略的にはよく似て、共通語と一致する[çi]が全国的に分布している。この類の子音には、硬口蓋摩擦音[ç]のほか[h]で表記された音も含めてある。調査者によって、[h]の表記に、[ç]の音をも含める場合があると考えられるからである。また、かなの「ヒ」表記をも含む。なお、有声音[h]が長野県南部の伊那地方に見られたが、これも地図では[çi]の類に入れた。母音については[i]のほか、富山・鳥取・九州各地に点在する無声母音の[i̥]、あるいは、母音がほとんど聞きとれないもの、また、東北などに散見する、[i̥]よりもわずかに広く後寄りの母音[i̥]も含んでいる。

東北・北陸・山陰などに分布する中舌母音は、地図には[çi̥]として示した。この類のうち子音[h]の扱いは[çi]の類の場合と同じである。

東京の下町方言などのように、この部分に[çi̥]の現われる地点は、関東南部・東北・長野・新潟・富山などに散見される。青森・富山には、中舌母音の[çi̥]が見られる。[çi̥] [çi̥]の現われる地点について11 図と12 図とを比較すると、11 図「ヒガシ」の方が多い。12 図「ヒゲ」で[çi̥]の地点は、11 図、さらに13 図・14 図でも、[çi̥]のまったく現われていない地点である。

[ç]と[h]の中間音[çh]([çh]も含む)は、東北を中心に見られる。この類の母音は、南関東では[i̥]であるが、全般的には[i̥]が多かったので、[çi̥]で代表させた。

中央日本語の古い発音とされている両唇摩擦音[Φ]は、東北・北陸・山陰・奄美など、辺境の地に残存している。これらは中舌母音[i̥]の地帯であるから、この類はいちおう[Φi̥]によって代表させたが、母音が[ɪ] [i̥]のものも若干含んでいる。この子音には、完全な両唇摩擦音のほか、[Φh] [Φç] [Φçh]のように二重調音的なものや、唇音の程度の軽いという報告もあったが、少しでも唇音が認められればこの類に入れた。なお、沖縄では11 図「ヒガシ」をアガリと言うことが多いため、HI-の音の分布は

12 図によってしか知ることができない。そこでは〔Φ〕とともに、本土に現われない〔p〕の分布を知ることができる。なお、この子音には、地点によっては有気・無気の区別があるが、地図には反映させなかった。

〔Φi〕の地帯にはほぼ重なって〔Φu〕が分布していることは、両者の発音上の関係を示すものと言えよう。〔Φu〕の類は、母音を〔u〕で示したが〔u〕の場合の方が多く、また、子音については〔f〕表記のものも含めてある。両図を比べると、〔Φu〕は 11 図に少なく、12 図では、北海道・房総半島南端・伊豆諸島・九州にまで広く見出される。両図間の違いは、おそらく語ごとの歴史の違いにもとづくものであろう。

〔he〕〔Φe〕も〔Φu〕の場合と同じく、11 図に少なく 12 図に多く現われている。〔ju〕〔çu〕〔hoi〕〔ti〕〔ŋ〕は 12 図「ヒゲ」の場合にしか現われない。以上のことから、「ヒガシ」では日本全土にだいたい音韻法則にあり語形が分布しているのに対して、「ヒゲ」では法則からはずれる語形が多いと言えよう。

13. ヒガシ(東)の-SI の音

14. シチガツ(七月)の SI- の音

13 図と 14 図とを比較すると、同じ SI の音でありながら、分布の様相があまりにも異なっていて驚かされる。

最初に、13 図から説明する。この「ヒガシ」(質問番号 273)は、11 図に示した HI- の音を第一に注目して観察した。したがって、-SI については、記録が必ずしも精密でない地点も含まれていると考えられる。そこで、この地図では、こまかい音声学的な区別は、取り立てて示さなかった。

〔ji〕の類には、子音について数地点に見られた口蓋化の程度の少ない〔ç〕、口蓋化のない〔s〕の音をも含めてある。母音については〔i〕も含めた。〔ji〕は、〔ji〕に含めることも考えられるが、近畿地方から西では、語末のためか、調査者の差ではなく、はっきりした分布が現われたので、特に分出して示した。あるいはアクセントが関係しているのかもしれない。この〔ji〕の類には、九州に見られる母音が聞こえない〔j〕だけの報告も 6 地点含まれている。いっぽう、中部地方から東にも〔ji〕の表記がかなり見られたが、調査者による表記の差と思われる分布になったので、この地方の〔ji〕はすべて〔ji〕

に含めて示した。

〔si〕～〔stü〕の類の分布する地域は、いわゆるズーズー弁の地帯である。ここでは、SI にあたる音に関するズーズー弁的な傾向だけを示した。したがってシとスの区別の有無とか、区別がないとすれば /si/ が欠けるか /su/ が欠けるかなどという音韻論的な問題はとり扱っていない。強いて〔si〕と〔stü〕とに二分すれば、前者は、青森・秋田・宮城・山形西部・新潟・富山・石川となり、後者は、岩手・宮城・山形中部・福島といえることができよう。〔ji〕の類は、〔si〕と〔ji〕の中間音を含むと考えられ、〔si〕～〔stü〕の地域の周辺と見られる地帯に散見される。

沖縄では、11 図で述べたように、この項目でアガリなどという語形が現われたため、-SI に関しては空白となる。

14 図「シチガツ」の SI- については、13 図には見られなかった〔çi〕が、西日本一帯から関東地方にかけて(北海道・東北にはない) 広く分布して注目される。11 図「ヒガシ」、12 図「ヒゲ」で〔çi〕の現われない富山・長野東端・神津島などにさえ及んでいる。この〔çi〕の類の音の内容は、11 図・12 図の〔çi〕の類に準ずる。ただし、この項目では(地図には表わさないが)、無声母音を持つ〔çi〕や、母音の消えた〔ç〕が、11 図・12 図と比べてかなり多く、西関東・石川・愛知・鳥取・九州各地に及んでいる。この母音無声化の現象は、無声子音〔tj〕などが後続しているため起こったものであろう。

SI について〔çi〕が「シチガツ」のように多く現われる例はほかになかった。音声項目で SI に関係する語例は、「ヒガシ」「シチガツ」以外にないが、わずかに関係があると思われる「ショオガツ」(質問番号 274)の語頭の SYOO- にあたる部分についても、宮城・山形にわずかに〔ço:] が見られる程度で、ほとんど全国に〔o:] が分布し、14 図とは平行しない。また、他の一般項目に現われる音声を参考にしても、13 図と似たものが多く、14 図のような現象は、特殊と思われる。これは、SI が単に語頭か語尾かという位置の問題ではなく、もっと特殊な後続音の影響とか、語ごとの個別的な事情が働いたりしたものと考えられる。

14 図においては、〔çi〕の地域の中に〔çi〕の類も、非常にわずかながら点在している。〔ji〕の類、〔ji〕の類、〔si〕の類については、分布も音の内容も、13 図に準じて考えられたい。ただし、無声母音を持つ〔ji〕は、この場合少

なく、分布もはっきりしないので、九州のものもすべて [i] の類に含めて示した。

15. カジ(火事)の-ZI の音

「カジ」(質問番号 277)は、調査の際、3 図に示した KA- の音を第 1 に注目して観察した項目だったため、-ZI についての記録は、精密でないものが含まれている可能性がある。そこで、ここでは、音声学的な厳密な区別は示さなかった。たとえば摩擦音の [ʃi] と破擦音 [dʃi] の区別は、10 図の-ZE の場合と平行するが、上述のような事情から、地図上に明示することは控えた。したがって、高知や九州にあると言われる「ジ」「ヂ」の区別に関する情報は、この図には盛られていない。

[ʃi] [dʃi] の類は、全国的に分布している。このうちには、図には示さなかったが、九州などで十数地点見られた無声母音を持つ [ʃi] も、含まれている。この [ʃi] は、13 図に示した [i] の分布と関連があると考えられる。なお、質問で求めたのは「火事だ」という形であって、-ZI の母音の直後に、断定の「だ」にあたる [da], [dʒa], [ja] など(「だ」の分布は 45 図を参照のこと)の音が接していることも関係があろう。中舌母音を持つ [zi] [dzi] ~ [zü] [dzü] の類、[~dzi] ~ [~dzü] の類は、図でもわかるように、13 図における [si] ~ [sü] の類、16 図における [tsi] ~ [tsü] の類とほぼ平行した分布を示す。図示しなかったが、母音 [i] 対 [ü] の分布も、13 図で説明した分布とほぼ一致する。[dʃi] [ʃi] の分布も 13 図における [i] の分布と平行している。口蓋化しない [zi] [dzi] などは、全国に 10 地点ほどが散在するだけである。1 地点ではあるが、愛知に [ze] が見られ、当地では [si] より古い音という注があった。

子音が無声となり、さらに母音も無声化したりあるいは脱落したりする [tʃi] [ʃi] [si] [çi] [ç] などが、鹿児島や五島などに分布している。これらは上に述べた [ʃi] と音声的にも近く、分布地域も重なっている。五島・天草に分布する子音が脱落した [i] も、分布の上で通ずるところがある。[ʔ] の類、すなわち-ZI にあたる部分が促音になっている地点が、北陸・瀬戸内海・九州・奄美にあるが、これは、つぎに「だ」にあたる音が接して生じたものが多からう。

沖縄では、多くの地点での回答が [çi:do:i] (火だよ)

などであるため、この項目によって-ZI の音を知ることはできない。

なお「ガンジツ」(質問番号 275)の-ZI-の分布地図(印刷では割愛)も、ほぼこれと同じ分布を示した。ただし [ze] [tʃi] [ʃi] [i] [ʔ] などの類は現われていない。この語についても、沖縄に別語形が多く見られることは、5 図の説明で触れた。

16. シチガツ(七月)の-TI-の音

「シチガツ」(質問番号 276)の調査の際には、14 図に示したような SI- の音を第一に注目して観察したため、-TI- についての記録はかならずしも精密ではないものが含まれているかも知れない。したがって、こまかい音声学的な区別は取りあげなかった。

[tʃi] の類には、地図では示さなかったが、母音が広く後寄りの [tʃi], 無声母音を持つ [tʃi] (九州に比較的多い) が若干含まれている。13 図・15 図と比較されたい。

[tsi] ~ [tsü] の類は、音を概略的にまとめた理由や、音の内容とその地域差など、13 図「ヒガシ」の [si] ~ [sü] の類、15 図「カジ」の [zi] [dzi] ~ [zü] [dzü] の類に準ずる。

以上の母音の問題のほかに、母音間の-T-が有声化する地域をも示した。これを 15 図と比較すると、-T-が有声音の [dz] であっても、-Z-が鼻音を伴う [~dz] などであって、両者の音声の違いもかなりあることがわかる。またこの-T-の有声化の分布は、28 図「赤い」に反映させた-K-の有声化に比べると、勢力が弱く、むしろ 4 図の-K-の有声化にやや似ている。これは [k] と [ts] という子音の違いよりも、「シチガツ」の場合、-T-の前後が [i] というせまい母音で、しかも、それらが往々無声母音 [i] になることが原因かと思われる。

九州南部の [ʔ] は、たとえば [jiggwat] [iʔgwaʔ] のように-G-の直前が促音であることを示す。

なお、印刷では割愛したが、参考までに、「シチガツ」「ショオガツ」「ガンジツ」の 3 語例における-TU にあたる音の分布のあらましをのべよう。全国的に [tsu] [tsü] [tsu] (またはその有声子音)などが、青森・秋田・山形南部・新潟北部・富山一部・石川一部・島根東部に [tsi] [tʃi] (またはその有声子音)が、高知・愛媛の高知寄りの地帯・大分東南部・奈良南部・山梨西端に [tu] [tʰu] が、

鹿児島・熊本西南部・大分西部・五島・対島に[ʔ][t]が、奄美・沖縄に[tʃi][tsi][tsü][ji]が分布している。

この事実と16図とを比較すれば、全国における-TIと-TUの対立の概略を知ることができよう。

形容詞項目全体について

▶本土の大部分では、形容詞の終止・連体形にイ語尾が現われる。しかし、かなりの地域で語尾が直前の母音と融合して、種々の音変種を生じている。次に、そのうち-AI、-OIにあたるものの各音変種について、もっとも詳しく示す場合の分類、およびその表記法を表示する（-UIにあたるものは語数が少ないので、その都度基準を定める）。

-AIにあたる語尾

後 前	j	i	ï	ɿ	e	ɛ	æ	ə	ɐ	a
j					jer	jeɛ	jæɛ			ja:
i		i:	ɨ						YAA	
ï			ï:			EE				
ɿ				ɿ:	le					la:
e		ei		eu	e:	ee	eæ	eə		ea
ɛ		ɛi	EE	ɛɿ	ɛ:	ɛe	ɛæ	ɛə	ɛɐ	ɛa
æ		æi		æɿ	æe	æe	ææ	æə	æɐ	æa
ə		əi		əɿ				ə:	əɐ	
ɐ			AI						ɐ:	AA
a	a:	ai	ai	aɿ	ae	ae	aæ	aə	aɐ	a:

[ai]と[ae],[oi]と[oe]は、イとエの区別のはっきりしている地域でも、連続的な各種の中間音を生じやすいので区別をせず、おのおのAI、OIにまとめた。表中の無模様欄にあたる音声は、周囲の地点の音声や調査者個人の傾向などを参考にして各地点ごとに決定した。半長音[*]も、同様に長音が短音かに分属させた。各地点における音声の詳細は「日本言語地図資料」に記録してある。

以上は、もっとも詳しく分類する場合の規則であって、語類の種別が多く複雑な分布を示す項目では、実情に応じて、母音の類や長短をいっそう簡単に統合して示した場合もある。詳細は、各項目の説明、または「日本言語地図資料」を見られたい。

-OIにあたる語尾

後 前	ï	i	ɿ	e	ɛ	æ	ə	ɐ	œ
w	wi:	wi:	WIH	wɛ:					
ï	ï:								
i		i:	ɨ						
ɿ			ɿ:						
e		ei	eu	e:	EE				
ɛ				ɛ:	ɛe	ɛæ			
æ					æe	ææ			
ə								ə:	
ɐ		ɐi		ɐɿ	OE		ɐ:	ɐɐ	
œ							œ:	œɐ	œ:
o	oi	oi	oɿ	œ	oe	OI	œ	oɐ	oe

- ▶九州のカ語尾は、本州の形容詞語尾の最後の-Iの部分に-KAが対応するものであって、たとえば、SUKAは本州のSUIに、SUIKAは本州のSUIIにあたると思われる。このカ語尾は、地図中で原則として円系統の符号を与えた。分布の比較的単純な項目については、九州西南部の[-ga]も-GAとして分出させた。
- ▶沖縄の形容詞語尾は複雑なため、原則として地図に表示することは省略し、凡例にはたとえばAMA-のように語尾部分を一で示した。そして、語尾の一例として、40図「辛い」に詳しい分布を示したから、ある項目に関する沖縄のある地点の形容詞の完結した全語形を知りたい場合は、その項目の凡例にある語幹部分と、40図「辛い」に示した語尾部分をつなぐことによって、いちおうの見当をつけることができる。ただし、各語によって多少異なる場合があるから注意を要する。「日本言語地図資料」に詳細が記録してある。

17. おおきい(大きい)

箱の大小を比べて質問した項目であるが、回答の中には、巨大とかその他種々の感情のこもった表現も含まれている可能性があるし、事実その類のものをいくつか指摘できる。また、この地図は、関連項目の20図「太い」21図「粗い」、対義語を扱った22図以下(「小さい」は22図)と関係させて考えるべきものであることを指摘しておく。なお、各地点で「大きい」「太い」「粗い」の3つの意味分野をどのように区別しているかについての総合的研究は、機会を改めて示す予定である。

全国を大観すると、まず、オオキイ類がほぼ全地域に分布する(この類の詳細図は、別に、18図に示した)。つぎに、デカイ・イカイの類が関東・中部・西中国に分布する(この類の詳細図は19図に示した)。フトイ類が中国・四国の西半から九州にかけて分布するほか、山形・新潟北部・佐渡にもわずかながら見られることは注目される。ズナイ類は福島を中心として分布する。奄美・沖縄に分布するUPU—, HUU—, WUU—などは、「大」(おほ)にあたる語形であり、HUTE—は「太」(ふと)にあたる語形と思われるが、沖縄本島・八重山に見られるMAGI—などは、本土に対応する表現の見出されない別系のものである。

デカイ・イカイの類が中央部に連続した領域を持ち、オオキイの類がその東と西、それに千葉南部・伊豆諸島なども含めた周辺部に分布していることから、デカイ・イカイの類は新しい発生と言えよう。また、デカイ(イカイではない)が、元来の領域を出発し、交通路に沿って、東北・東海・近畿の各地に侵入している様子も地図からうかがえる。北海道のデカイも、中央の言語として広まったものであろう。

しかし、一方では、デカイ・イカイ類の分布地域のうち、東京市街地・関東中央部から湘南方面にかけて、また、長野にも交通路に沿って、オオキイ類が存在することが注目される。これは、オオキイ類が、現代標準語としてふたたび勢力を持つようになり、デカイ・イカイ類の領域の上に広まりつつあることを示していると言えよう。この種のオオキイ類は、18図「オオキイ類の詳細図」によれば、他の地域のような訛形をとらず、OOKIIという標準語形の多いこともその裏づけとなる。地図からは除いたが、

デカイ・イカイ類と併用されて新しいとの注記のあるオオキイも、この地帯にかなり見られた。

デカイ・イカイ類とオオキイ類とを併用する地点では、デカイ・イカイ類の方を、強調した場合・感情をこめた場合とする注が非常に多く見られた。

デカイ類が中央に連続して分布しており、イカイ類がその東辺と西辺に、また、西中国に離れて分布することから、古くはイカイ類が連続した領域を持っていたのではないかと考えられる。IKAIに接頭辞DO-のついたDOIKAIの存在は、DOIKAIからDEKAIが発生し、これがイカイ類の領域を分断して関東から中部にかけて広まった歴史をうかがわせる。デカイ類とイカイ類の併用ではデカイの方を強調形とする注記がかなり見られたが、これも、デカイが接頭辞のついたものに由来することを示すものであろう。DEKAIの専用地域では、この語形がすでに強調ではなく普通表現となったため、強調の場合は、これにまた接頭辞DO-をつけてDODEKAIが生じたのであろう。

もっとも、オオキイ類対デカイ・イカイ類の関係については、別の面から見ることでもできる。すなわち、この地図では、箱の大小の場合に限って調べたため、イカイ類の分布が不連続になったのであって、違う場合の用法——たとえば、感情的な表現とか、箱ではなく事からの大きさとか——について分布地図を描けば、あるいは、イカイが中国から茨城まで連続して、また、さらに広い地域に見出されるのかも知れない。

フトイ類については、西日本のほか、山形西部・新潟北部・佐渡にもわずかながら分布していて、非常に古いものかとも思われる。しかし、20図「太い」21図「粗い」を参照すると、それらの図で山形・新潟などにオオキイが分布していて、九州などと同質のものが古くは連続して分布していたかどうか疑問である。すなわち、この地域は、「大きい」「太い」「粗い」の意味の区別が元来あいまいであるらしく、周辺からのいろいろな語形が押し寄せる場合、意外な語形を採用する可能性もあるからである。その点、あるいは、瀬戸内海中央から九州東部にかけての錯綜地帯のものと同質であろうか。この西日本の錯綜地帯では、併用の場合のフトイに新しいとの注記があったりして一概には言えないが、フトイが元来存在したところにオオキイが侵入して、このような様相を呈したのではないかと思われる。

ズナイ類は、福島を中心領域とするが、ほかに千葉に

も分布している。古くは南奥羽から関東にかけて広く分布した語形とも考えられるが、さきにのべたイカイ類と同様、すこし違った用法・意味分野について分布地図を作れば、あるいは、連続した領域を見せるのかも知れない。福島では、オオキイ類より、ズナイ類を巨大な意味に使うとの注記がかなり見られた。

沖縄の MAGI— は、新しい語形と考えられ、その両側の HUU—, UPU— などは、古いものの残存かと思われる。八重山のもは沖縄本島からの輸入であろう。

なお、オオキイ類、デカイ・イカイ類はそれぞれ、18 図と 19 図に詳細を示したが、フトイ類については詳細図を作らなかった。20 図「太い」の場合に、この図より詳しい分類を示したので、項目は異なるが、語形の詳細について見当をつけることはできる。

18. おおきい(大きい)

—オオキイ類の詳細図—

この地図は、17 図「大きい」におけるオオキイ類の中の諸語形(緑色の符号で示したものを)、さらに細分して分布を示したものである。17 図でまとめて示した語形を、この 18 図でいかに細分したか、以下に対照して示す。

17 図の語形	18 図の語形
OOKII	凡例の OOKII から OKKYUI まで
OOKINA	OOKINA, OOKENA, OKENA, OKKENA
OOKIDA	OKIDA, OKKIDA, OKKITA
OOKINAI	凡例の OOKINEE から OKKONE まで(ただし OKKEN を除く)
OOKIKA	OOKIKA, OOKKA, OKKA
OOKINAKA	OOKINAKA だけ
OKKEN	OKKEN だけ
BOOKYA	BOOKYA だけ
UPU—	凡例の UPU— から UBO— まで
ODO—	ODO— だけ
HUU—	HUU—, HUI—, HUICYA—, HWII—
WUU—	WUU—, BU—

なお、母音間の -K- が [k] か有声音の [g] かの問題は、この地図では、区別しなかったが、28 図「赤い」の場合に準ずる分布が見られたことを付記しておく。

この詳細図は、オオキイ類の語尾の文法的な形態の差、母音や子音の相違、長音が短音か、促音の有無などをこまかく示したものと見えよう。すなわち、このような差は、文法的な制約、類推、音声的な環境、意味の強調などによって生ずる場合が多く、地理的言語差として、言語地理学的に処理しにくいものを含むが、いくらか地理的分布が見られるので、簡単に記述しておく。

OOKII などのイ語尾が、全国的に分布している。オオキイ類が九州にはあまり分布しないので、カ語尾はあまり見られないが、OOKKA, OKKA はオオイではなくオオキイに対応する OOKIKA からの変化であろう。沖縄の UPU—, HUU— などは「おほ〜」に対応するものであろう。

形容動詞形の OOKIDA などのダ語尾が北海道・青森・新潟に点在すること、OOKINA などのナ語尾が山陰を中心に中国・四国の各地に分布することは、他の形容詞項目、たとえば 26 図「四角い」27 図「黄色い」28 図「赤い」などに通ずる傾向と言えよう。OKKINAI, OKKINAKA などのナイ語尾は九州東部に分布するほか、五島と四国にも見出される。

-K- が促音をとまなるものに分布が見られる。促音のある語形とない語形との併用の場合は、前者が強調形であるとの注記が多く見られた。また、語形の分布する量からみて、促音の存在することと母音の短いことは関係があるようである。青森などに分布する促音もなく母音も短いものは、この地域の音韻上の性格によるものと考えられる。語尾の母音 II と EE (または I と E) にも、~KYOI にもある程度まとまった分布が見られる。

19. おおきい(大きい)

—デカイ・イカイ類の詳細図—

この地図は、17 図「大きい」におけるデカイ・イカイ類の中の諸語形(赤色の符号で示したものを)、さらに細分して、分布を示したものである。17 図でまとめた語形を、この 19 図でいかに細分したか、以下に対照して示す。

17 図の語形	19 図の語形
DEKAI	凡例の DEKAI から DEKKYAA まで (DEKOI, DEKKOI を除く)

DEKOI	DEKOI, DEKKOI
DODEKAI	DODEKAI, DODEKEE
DOIKAI	DOIKAI だけ
IKAI	凡例の IKAI から IKKE まで
AKAI	AKAI だけ

母音間の-K-の音について、また、分類の方法については、18図の説明を参照されたい。

符号は、デカイ類とイカイ類の違いを色で示し、促音のあるものは薄色にし、-KAI, DO-などの部分の違いは、デカイ類・イカイ類ともに、同形の符号を用いた。

20. ふとい(太い)

太い棒と細い棒を比較する質問で得た回答によって描いた分布地図である。なお、関連項目の17図「大きい」21図「粗い」、さらにそれぞれの対義語を扱った22図以下(「細い」は24図)と関係させて考えるべきものであることを指摘しておく。

全国を大観すると、フトイの類が全地域に分布し、そのほか、オオキイの類が中国・愛媛・東九州のほか、山形・新潟・伊豆諸島などにも分布する。これは21図「粗い」におけるオオキイ類の分布とは異なるが、24図「細い」におけるチイサイ類の分布とやや似ていて、表裏関係を思わせる。デカイ・イカイの類は、北陸・関東・岐阜などに分布し、「粗い」の場合と比較すると、その領域はほぼ2倍の広さを占める。ズナイの類は福島にわずかに見られる。奄美・沖縄における諸語形の分布は17図「大きい」とほとんど一致する。すなわち、この地域では、西日本一帯と同じく「大きい」と「太い」との意味の区別を語形によってしていないことになる。

フトイ類は全国的に分布するが、17図「大きい」におけるフトイ類の分布領域や、21図「粗い」におけるフトイ類の領域を参照すると、西日本とそれ以東とは、異質のものであることがわかる。すなわち、瀬戸内海中央から西はすべての項目をフトイと言う地域であるのに対し、東では、共通語と同じく「太い」だけをフトイと言う。したがって、この地図における瀬戸内海一帯のオオキイ類とフトイ類の錯綜地帯も、西半分と東半分では性格が異なると言えよう。西半分は、元来区別のなかった地域に、新しい勢力が侵入したために起こった錯綜であり、東半分は、

もともと区別があった地域に、別の新しい勢力が侵入したために起こった錯綜と推定できる。17図「大きい」の場合にフトイ類の分布していた山形西部・新潟北部・佐渡に、この「太い」の場合は逆にオオキイ類が多く分布することは注目される。なお、他図との比較の詳細は、機会を改めて発表する予定である。

北陸などに分布するデカイ類は、21図「粗い」の場合にはほとんど見られない。これは、これらの地点で「大きい」「太い」をデカイと言い、「粗い」はアライと言っで区別して表現していることを示す。

この地図では、全国的に同根の語形、フトイ類が広く分布することから、全国における形容詞語尾の連母音-OIにあたる音声の分布を知るためにもっとも適当な地図と言えよう。[y] [ø] [œ]などの音はこの地図ではÖにまとめ、長音の [y:] [ø:] [œ:]などは、ÖEにまとめた。

その他、フトイ類の音変種を見渡すと、-T-の部分に促音が伴うかどうかについての分布が見られる。これは、18図における-K-対-KK-, 23図における-S-・-C-対-SS-・-CC-の分布に通ずるものと言える。併用の場合-T-の部分に促音のある方が強調であるとの注記もかなり見られた。これも、18図・23図の場合と共通する。千葉にカイ語尾ではなくコイ語尾と思われるHUTOKKEEがあり、ここは、24図でもHOSOKKEEとなっている地域である。

BUTOI など、頭音がBである語形が、近畿や千葉北部に分布する。これらは、比較的近くに分布するZUBUTOI, DOBUTOI, GOBUTEEなどと関連があるものと思われる。ZUBUTOI, DOBUTOI, GOBUTEEなどはほとんどHUTOIと併用であらわれ、しかも強調形であるという注があり、またBUTOIもHUTOIと併用された場合には強調形であるという注記が見られた。

この地図に現われるオオキイ類、デカイ・イカイ類などの語形の変種の詳細については、項目は異なるが、18図・19図に示したのものによって、見当をつけることができる。

21. あらい(粗い)

この項目では、粒の大小ではなく、ふるいの網の目の粗いものとこまかいものを比較して質問した。なお、こ

の地図を考えるにあたっては、関連項目の17図「大きい」20図「太い」、およびそれぞれの対義語を扱った22図以下（「こまかい」は25図）と対照されたい。

全国を大観すると、アライの類が全地域に分布する。その他、オオキイの類が、西日本では20図「太い」の場合とほぼ同じく、九州東部・中国・四国に分布するほか、東日本の全体に散在する。デカイ・イカイの類は、「太い」の場合と違って、北陸に現われず、東寄りの地域にかなり多く散在する。この「粗い」の図におけるオオキイ類、デカイ・イカイ類の現われ方は、「こまかい」におけるチイサイ類の現われ方と共通性があり注目される。フトイ類は、17図「大きい」におけるフトイ類より、地点は少ないが地域は一致し、瀬戸内海西半から西九州全域に分布する。沖縄はアラ～であって、17図「大きい」20図「太い」の場合と区別がある。この図には、そのほか、他の図に見られない別系の語形、たとえば、ウスイ、アツイ、秋田のアバライなどがある。

アライが全国的に分布していることは、地図のとおりであるが、17図「大きい」と共通するオオキイ、デカイ・イカイなどの類が近畿を中心としてきわめて少ないこと、それらとアライとの併用でアライの方が新しいとの注記が多いことから、アライが現在新しい勢力を持っていることがわかる。

アライ類とフトイ類との併用の場合についても、アライを上品とか新しい表現とする注記が多い。また、他の項目では別系の語形をまじえず、フトイ類専用の九州西部に、この図についてだけフトイ類の勢力が半減し、アライと対等の勢力で分布していることは注目される。このことから、九州西部では、「粗い」は「大きい」「太い」に対して意味を区別する傾向を持つと言えよう。沖縄で「粗い」対「大きい」「太い」の区別があることも、これに連続する。

この地図では、全国的に同根の語形アライ類が広く分布するので、「辛い」「赤い」「甘い」などとともに、形容詞カ語尾の分布のほか、イ語尾の連母音 AI にあたるものの分布がよくわかる。ただし、ARAKOI などのコイ語尾が、岐阜北部に、それと関係があると思われる ARAKUTAI が愛知・三重に分布し、また、新潟・長野・山梨・伊豆から東（東北北部や佐渡には見られない）にポイ語尾が散在している。これらのポイ語尾、コイ語尾は31図「まぶしい」におけるものと通ずるところがある。そのほか、OOMAKAI, OOMAKADA が山

形・東海にある。これらは、25図「こまかい」における KOMAKAI, KOMAKADA と関連があろう。

ARAME が岩手・山形・新潟・中国・九州の各地に、また、OOME が、秋田・山形・長野・愛知の各地に点在する。これらは、アラマイ、オオマイ という形容詞の音変種ではなく、「～目」にあたる名詞形の回答と考えられる。

なお、この地図におけるオオキイ類、デカイ・イカイ類、フトイ類などの語形の変種の詳細については、項目は異なるが、18図・19図・20図において示したものによって見当をつけることができる。

22. ちいさい(小さい)

箱の大小を比較する質問で得た回答によって作図したものであるが、極小とか、そのほか種々の感情のこもった表現をも含んでいることを指摘しておく。この地図を考えるにあたっては、関連項目の24図「細い」25図「こまかい」および対義語を扱った17図以下（「大きい」は17図）と対照されたい。なお、各地点で、「小さい」「細い」「こまかい」の3つの意味分野をどのように区別しているかについての総合的研究は、機会を改めて示す予定である。

全国を大観すると、兵庫あたりを境に、東のチイサイ類（この類の詳細図は、別に、23図に示した）と西のコマイ類に二分され、そのほか、山陰・高知・九州北端や西海岸にホソイ類が分布していることがわかる。また、秋田にベッタイ、岩手にパッコ、新潟・山梨・八丈島にノッコイ、静岡にコスイなどの類が分布し、沖縄には INA—, IMI— などがある。チイサイ類は大部分の地域で「細い」や「こまかい」と意味の区別を語形の違いによってするが、それ以外の語類の分布する地域では、「小さい」の意味と「細い」や「こまかい」の意味とを語形の違いによって区別しないことが多い。

チイサイ類とコマイ類の接触地帯（兵庫付近）では、両者併用の地点が見られる。それに連続して兵庫岡山県境にも同様の併用がかなりあったが、チイサイ類に共通語的との注があるため、原則により地図ではコマイ類の単用としてある。さらに、岡山にチイサイ類が見られる。この一連の事実は、現在東から共通語が侵入しつつあることを示すと言えよう。もっとも、岡山は、福岡東南部・

大分と同様、24 図「細い」25 図「こまかい」でもチイサイ類の現われる傾向のある地域であるから、兵庫以東のもの、あるいは性格が異なるのかも知れない。

チイサイ類の分布地域である滋賀・紀伊半島などの近畿周辺部、および東日本の伊豆半島や千葉などにコマイ・コマカイの類が点在し、これらは残存形かとも思われるが、関連項目の徹底的な比較を経なければ結論は出せない。長野の CINMAI は、地図では赤色の符号を与えたが、この付近に現在コマイが分布していないので、チイサイとコマイの混交かどうか疑問もある。チビイなどとの関係を考えるべきかも知れない。

山陰・高知・北九州に分布するホソイ類と、それらの周囲に分布するコマイ類との歴史的な関係については、いま速断することは難しいが、これらの地域では、「小さい」「細い」「粗い」の3項目を区別しない言語が本来の方言らしい点で共通する。

沖縄の KUU—, HUU—などは、地図ではチイサイ類と同じ色の符号で示したが、「小」(こ)に対応する語形と思われるので、23 図チイサイ類の詳細図からは除いた。GUNA—, GUMA—はコマ~に対応するのであろう。

なお、コマイ・コマカイ類の語形の詳細は、色による区別も利用して 25 図「こまかい」において、また、ホソイ類の語形の詳細は 24 図「細い」において、ともにやや詳しく分類して示してあるので、項目は異なるが、おおよその見当をつけることができる。

23. ちいさい(小さい)

—チイサイ類の詳細図—

この地図は、22 図「小さい」におけるチイサイ類(茶・橙色の符号で示したものを、ただし沖縄を除く)を、さらに細分して示したものである。22 図でまとめて示した語形を、23 図でいかに細分したかを対照して下に示す。

22 図の語形 23 図の語形

CIISAI ……………凡例の CIISAI から CHISOI まで

CHISAKA ……………CHISAKA だけ

CICCYAI ……………凡例の CHICYAI から CINCII まで

CYAI ……………CYAI だけ

CINAI ……………CINAI だけ

CIKA ……………CINKA, CIKKA

CIKUI ……………凡例の CHIKUI から CINKUI まで

CIKOI ……………凡例の CIKKAI から CINGOI まで

CISAKOI ……………凡例の CISAKOI から CISYAKOI まで

CICYAKOI ……………凡例の CHICYAKOI から CINCYAKOI まで

CYAKOI ……………凡例の CYAKOI から CYOKKOI まで

なお、CI が [tʃi] であるか [tsú] であるかは区別して示さなかったが、16 図「シチガツ」の -TI- の場合に準ずる。

結局、この詳細図は、子音の違い、長音・促音などをこまかく示したことになる。このような差は、強調とか親愛の情とかいう心理的なものや、音声的な環境などが変化の原因になったりし、言語地理学的解釈は難しいと思われるが、いくらか分布が見られるので記述しておく。

CIISAI などの C—S—類は、ほぼ全国に分布するが、このうち第1音節の短いものが、北陸・近畿・中国のほか東北部に見られる。促音を持つ CISSAI は、近畿を中心にかかり見られる。

CICCYAI などの C—C—類は、東北から関東にかけて、また北陸から近畿にかけて分布し、促音が多く現われている。

C—S—類と C—C—類のおのおのにコイ語尾のついたものが、東北などにまとまった分布を見せている。CYAKOI などは、CICYAKOI などの第一音節が脱落して生まれたものであろう。このことは、東北の中央山脈から太平洋側にかけてと、関東南部における両者の分布からも推定される。ただし、両者を併用している地点で、CYAKOI より CICYAKOI がもっと小さい感じを表わすという注もあるので、現存の CICYAKOI の中には、あるいは CYAKOI から生じたものがあるかも知れない。上記の CISSAI が分布する近畿以外では、促音は C—S—類では現われにくく、C—C—類に現われやすいことになる。第一音節が短く、しかも C が促音でないものが東北部に分布することは、C—S—類にも通じ、この地域の音韻的事情を反映するものと思われる。C—S—類と C—C—類の併用で、後者が非常に小さいとか、子供に対することばとかの注記もかなり見えている。N のはいるものが福島東部に分布を見せている。CYAI は CICYAI からの変化とも考えられるが、22 図に示した ENCYAI と

関係があるのかも知れない。

北陸に1地点あるCINAIは、27図「黄色い」におけるキナイなどのナイ語尾かと思われる。九州のCINKA、CIKKAはチイ(調査結果では見あたらない)に対応するものであろうか。クイ語尾は山梨などに、コイ語尾は北陸・近畿などに分布する。鹿児島はCINKEは、チイが隣接のCINKAの影響でCINKAIを生じ、それが、音韻法則によってCINKEとなったものかも知れない。

24. ほそい(細い)

太い棒と細い棒を比較する質問で得た回答によって描いた分布地図である。なお、この地図を考えるにあたっては、関連項目の22図「小さい」25図「こまかい」、およびそれぞれの対義語を扱った17図以下(「太い」は20図)と対照されたい。

全国を見渡すと、中国・四国あたりを境に、東のホソイ類と、西のコマイ類に二分されているが、九州西部にもホソイ類が散在して注目される。チイサイ類は、山形・新潟・山陰・九州東北部などに、ややまとまった分布領域を持つけれども、全国的にも散在している。その他の、ノッコイ類、コスイ類などは22図「小さい」25図「こまかい」の場合と比較して、かなり地点数が少ない。

東日本のホソイ類と対立する西日本のコマイ類の等語線は、22図「小さい」25図「こまかい」におけるコマイの等語線と比べて、かなり西に寄っていることが注目される。

この等語線より西にも、ホソイ類がある領域を持って分布する。そのうち、山陰では「小さい」の場合もホソイ類であり、また、高知・北九州では「小さい」「こまかい」ともにホソイ類であることから、東日本に分布しているホソイ類とは異質なものと見えよう。類義語との張り合いという点からは、むしろ周囲のコマイ地域と通ずるものがある。このことを裏付けるように、こまかく見ると、山陰・高知のホソイ類は、東のホソイ類とは分布領域が連続していないようである。

鳥取と九州東北部にチイサイ類が現われることは、その地域が、ホソイ類とコマイ類の接触地帯であることに関係があるかと思われる。さらに言えば、22図「小さい」25図「こまかい」において、チイサイ類が岡山にかなり現われたことも、この地域が、この図でわかるように、「細

い」について、ホソイ類とコマイ類の接触地帯であることと関連があるかも知れない。

奄美・沖縄における諸語形の分布は、22図「小さい」の場合とほとんど同じであって、この地域では、九州本土と同じく「小さい」「細い」の区別を語形の違いによって表現しないことがわかる。

ホソイ類のうち、東北と千葉にあるHOSOKOIなどコイ語尾の分布は、23図「小さい」におけるCICYAKOIなどのコイ語尾の分布に通ずる。千葉における2地点では、併用の場合、HOSEEよりHOSOKKEEの方をとくに細い感じを表わすとき使うとの注記が見られた。

紀伊半島東部に促音を持つHOSSOIが分布する。また、それに近い和歌山で、HOSOIとHOSSOIを併用して、HOSSOIの方を強調形とする注記が見られた。一般にHOSSOIの分布地域は、23図「小さい」におけるCISSAIの分布地域に通ずる。

この地図は、全国にホソイ類が比較的広く分布しているので、20図「太い」について、形容詞語尾の連母音—OIにあたる部分の分布を見るのに適当な地図と言えよう。その表記については、20図の説明で触れておいた。

なお、コマイ類の語形の詳細については、25図「こまかい」においてやや詳しく分類して示したので、項目は異なるが、それによっておおよその見当をつけることができる。

25. こまかい(細かい)

この項目では、粒の大小ではなく、ふるいの網の目の粗いものとこまかいものを比較して質問した。なお、この地図を考えるにあたっては、関連項目の22図「小さい」24図「ほそい」、およびそれぞれの対義語を扱った17図以下(「粗い」は21図)と対照されたい。

全国を大観すると、コマイ類とコマカイ類が広く分布する。ただし、中国・四国から西(奄美・沖縄を除く)では、22図「小さい」24図「細い」の場合もコマイ類である場合が多く、それより東のものとは性格が異なる。そのほか、ホソイが四国の大部分に分布し、また、それほど多くはないが、山陰・九州北端・東海・岩手などにも散在している。チイサイ類は、中国の一部・九州の東北部のほか、東日本全体に散在し、24図「細い」の場合のチイサイ類より地点数が多く、むしろ21図「粗い」における

オオキイ類, デカイ・イカイ類の分布に似ている。奄美・沖縄では22図「小さい」と24図「細い」は同じ語形を用いるのが大勢であったが, この「こまかい」だけは全面的に違って, 「小さい」や「細い」に対して「こまかい」を意味分野として区別していることがわかる。これは, この地域における「大きい」「太い」と「粗い」との対立に平行する。パッコイ・ノッコイ・コスイなどの類の分布地点は, 22図「小さい」の場合よりはかなり少ないことが目立つ。しかし, 24図の場合よりは多い。

山陰のホソイ類は, コマイ類と併用する3地点で, ホソイ類の方が HOSE, HOSYE などの訛形であるのに対して, コマイ類の方が KOMAI という形であること, また, KOMAI の方に新しい表現との注記があることなどから, ひと昔前は, ホソイ類が現在より広い地域に——22図「小さい」24図「細い」と同じように——分布していたのではないかと推定される。それが, 西日本共通語的な KOMAI に侵蝕されたのであろう。

四国のホソイ類は, 22図「小さい」24図「細い」の場合と比較すると, 分布領域が広く, また多少ずれており, 「小さい」「細い」「こまかい」の区別はかなり複雑に錯綜しているようである。

東海地方にホソイ類が見られることは, KOSUI, KOCUI など各図に共通して現われる特殊語形が隣接地域に見られることと関係があるかと思われる。

コマイ類とコマカイ類の分布についてのべる。まず, 中央に分布するコマカイ類 (KOMAKOI も含む) に対して, 東北・佐渡・四国・九州などの周辺地域にコマイ類が分布している。これは, コマイ類の方がコマカイ類より古い形であることを物語っている。瀬戸内海をへて九州にいたる KONMAI, KONMAKA, 九州の KOMANKA, KOMENKA などは, KOMAI, KOMAKA から変化・発生して広まったと思われる。

コマカイ類の中では, 近畿・東海・関東などに分布する KOMAKAI と, 東北部・関東南部・北陸・紀伊半島などに分布する KOMAKOI とがある。KOMAKAI は日本の中心地帯に連続して分布する優勢な語形である。四国にある KOMAKAI は, 元来の方言であるコマイ類とホソイ類などが錯綜しているところへ共通語として侵入したと考えられる。KOMAKOI は, その領域が周辺部であること, しかも分布が連続していないことから, KOMAKAI に圧迫されつつある語形と言えよう。歴史的には, 江戸あたりで, コイ語尾>—KEE>カ

イ語尾, という変化が生じたのかも知れない。さらに, KOMAKOI の分布地域は, 22図「小さい」などを参考にすると, コイ語尾の優勢な地域と言うことができるので, 古くは, この地域にコマイが分布していたが, それにコイ語尾をつけることによって KOMAKOI が発生したのではないかとも思われる。なお, 他の形容詞項目でコイ語尾の見られなかった紀伊半島に, KOMAKUI の分布することは注目される。

KOMAI の分布地域の中に KOMAME が数地点認められ, 「こま目」であるとの注があった (コママイという形容詞の音変種ではない)。これは21図の「粗い」で ARAME を分立させたことと平行する。KOME は名詞形との注記がなかったので, 地図ではすべて形容詞コマイの音変種としての扱いがしてあるが, このうち「小目」という名詞が含まれているかも知れない。KOMEDA は形容詞でないことが明らかなので別に示した。

26. 四角い<箱>

45図「いい<天気だ>」の場合と同じく, 連体形にあたるものを調べた。

全国は, 大きく, シカクイ類 (SIKAKUKA などを含む) のように形容詞形をとるものと, シカクナ類のように形容動詞形をとるものに分かれるが, 分布はやや複雑である。符号の与え方は, 27図「黄色い」, 47図「きれいだ」, 48図「きれいに」と共通させてあるので参照されたい。

青森から日本海側を新潟北部にかけてシカクダ類が分布している。この地帯は, 形容動詞の連体形に終止形と同じダ語尾を使う地域である。終止形については, 27図「黄色い」, 47図「きれいだ」を参照されたい。

形容詞形, 形容動詞形をとらず, シカクノ類のように, 助詞「の」にあたるものをつけて体言を修飾する地域が, 関東地方外辺部と宮崎・奄美・沖縄などにかなりの分布を持って存在する。さらにこの地域に連続して, 福島・九州・沖縄には, 助詞のないシカク<ハコ>のような言い方も分布している。ただし, 凡例の最後にある KAKU はすべて, KAKUBAKO の例ばかりで, KAKU の部分が一語としての独立性を持たないらしいことを付記しておく。このように助詞を用いる地域と名詞のままの地域の連続は, 形容詞・形容動詞形の現われにくい(と

考えられる) 性格に一定の分布地域のあることを示している。

分布から見て、関東のシカクナ類は、昔は、周辺に現存するシカクノ・シカク類が分布していたところに、新たに広まった表現と考えられる。近畿を中心として見ると、シカクイはシカクナに比べて新しい表現と思われる。九州・沖縄については、北から、ほぼ、シカクイ類(カ語尾を含む)・シカクナ類・シカクノ類・シカク類の順に並んでいて、近畿から東へかけての分布と平行して、変化の段階を暗示しているようである。

この図は、以上のように、文法的な形態に注目して色分けしたが、語幹部分をシカク～でなく、カク～と回答した地点については、各色とも白ぬきの符号で示した。これは三重・中国・四国などにまとまった分布を示している。ナガシカク～・ナガカク～・マシカク～などの類の回答は、地理的言語差として無意味なものかとも考えられるが、いちおう地図に反映させた。

27. 黄色い

巨視的に見ると、全国が、形容詞形をとる地域、形容動詞形をとる地域、その他の地域に分かれ、しかも、語構成上語幹部分が名詞にあたる点など、26図の場合と共通するので、符号もできるだけ共通なものを使った。

形容詞形のうち、キイロイ類は、凡例で KIIROI (ki:re, tʃi:roi も含む) から KIIROKYA までのものと、KIIROKA を含む。この類は、精粗はあるが、全国的に分布している。このうち、KIIROKA のカ語尾の分布地域をほかの形容詞項目の図と比較すると、九州南部で、東に広く張り出していることがわかる。これは、あるいは、作為的に形容詞形を答えたことが原因となっているかも知れない。キイ類は、KII, KIIKA, KINKA, KIIKA, KIISAN であるが、北海道・長野のほか、福井・滋賀・三重以西に分布している。奄美の KIISAN は -SAN のほか、-SA, -SYA, -SAI, -AI などの語尾をも含ませた。それらの語尾分布は、ほぼ40図に準ずるので、それについて見られたい。

キナイ類は、草色の符号をもって示したが、東海・北陸・愛媛・九州北部などに分布している。～ナイ語尾は、26図に見あたらず、28図にアカナイが少し見られる程度であるが、この図においては強力である。

形容動詞形のうち、キイダ・キイロダ類は例によって東北に分布する(ただし、連体形の場合はイ語尾の形容詞形をとるという注記が、数地点あった)。28図でアカダの見られた出雲地方には、この図ではキイナ・キイロナなどというナ語尾が現われ、逆に、四国で、28図にはまれなジャ語尾が現われてくる。キナ・キイロナの類は、中国・四国・九州に分布する。この語尾は、連体形だけでなく、終止形として用いられているらしい。これは、一般の形容詞項目におけるナ語尾の分布より広い地域に及び、47図「きれいだ」だけがこれに似たナ語尾の分布を示している。ただし、このキナ・キイロナ類のうちに、あるいは名詞に終助詞のついたものが含まれているかも知れない。このキナ類、とくに西日本のものは、分布から見て形容詞のキナイ類と歴史的な関係がありそうである。なお、対島に1地点、[kinad3a] があったが、分布からみて KINA に入れてある。形容詞・形容動詞の語尾については、さらに多くの語の諸活用を調べることによっていっそう深い解釈に到達できよう。

この項目は、調査の際、形容詞の終止形を求める指示があったにもかかわらず、名詞形しか得られない地点がかなりあった。この名詞形回答地域は、分布から見ても、～ダ・～ジャの地域と重なり、内容的に同じものかも知れないと考えられる。そうすると、東北・山陰・四国・宮崎・沖縄などでは用言としての活用が「黄色い」について現われにくいことになり、分布からみて日本語の古い姿の残存らしく考えられる(ただし、東北において、連体形でならイ語尾の形容詞形を使うという地点が数か所あったことはすでに述べた)。

北陸・近畿・四国などは、一音節語を長めに発音する傾向のある地域であるが、この図では、いちおう形容詞形として扱った KII の中にも、じつは名詞の「黄」を回答したという注記のある地点を数か所含んでいる。九州東南部の KII は形容詞カ語尾地帯の KIIKA, KIIKA に隣接することから、キイというイ語尾の形容詞形と思われるが、ki:roi>ki:ri:>ki: という音韻変化によって成立したものも含まれよう。

形容詞・形容動詞の語幹部分および名詞を総合して、キ類とキイロ類を比べると、キイロ類の方が中央部に分布し、より新しい形かと思われる。

調査の際使用した黄色い紙の色——「日本色彩研究所」の標準色「黄色(Chrome Yellow)〈色相・明度・彩度番号 7.5—18.5—6〉」——に対する回答としては、上述

の「黄色」の系統のほか、図によれば「卵色」「鬱金色」「金色」「青色」などにあたるものがある。そのほか、地理的言語差と考えられないため図には示さなかったが、「山吹色」「草色」「薄茶色」「粟色」「茶色」「土色」「木肌(?)色」「灰色」「桃色」などにあたる語形が得られた。沖縄のHUGAは、「卵」の意である。「鬱金」にあたる UKON—は、[ukon, ukoniro, okon, okoniro, okonko, ukonda, okonda], さらに宮城などに見られる、[okonkoe] という形容詞などをまとめたものである。国語史的に注目される AO—は、青森・八丈島・沖縄など、非常に辺境の地に散在している。質問番号 020 の「アオイ紙はどの色か」という調査の結果(分布地図の印刷は割愛)では、青森のものは、「アオイ」という語で表わす範囲に黄色い紙も入っているので確かであろうが、八丈・沖縄のものは、「アオイ」の中に黄色い紙を入れていないから、安定しない呼び方かもしれない。なお、日本人の色盲率については、28図の説明において触れる。

作図の際、原則として、併用の場合、共通語と同形で<新><上><稀>などの注記のあるほうの語を除いてきたが、この図にかぎり、形容詞形を求める目的があったので、形容詞形以外と併用されたキーロイ類に<新><上><稀>などの注があっても、そのまま併用として採用した。

28. 赤い

全国一様にアカ～の系統が分布しているため、この図では、まずその語尾の文法的な形態に注目して分類した。形容詞形は赤・桃、～ダ・～ジャ・～ヤ・～ナなど形容動詞的なものは緑・草、アカのように名詞でしか答えないものは茶・橙で示した。ただし、沖縄だけは、語幹子音の違いに注目して区別した。すなわち、AKA—などを赤色で、AHA—などを緑色で、というふうに。

形容詞の類の中にはアカナイ類のようにナイ語尾をとるものが若干見られる。これは、27図におけるキナイの類と比較される。

調査は、形容詞の終止形を求める指示によったため、方言の実際よりも形容詞形が多く現われたかも知れないが、それにもかかわらず、アカダ・アカナ・アカジャなどの類が新潟や山陰に見られ、さらに、北海道・東北・長野・三重・中国・九州の一部などにアカという名詞形しか得られない地帯が見出された(すなわち、これらは、

実際にはもっと多いのかもしれない)。この分布は、27図の場合と平行し、アカダなどの類と名詞のアカの類は、あるいは同種のものかも知れないことを思わせる。

さて、全国の大部分が「アカイ」であるため、この図では音変種をも表示した。まず母音には含まれた-K-の子音が、有声音かどうかを見るため、[g][k][ɣ]などの音をGとして示し、薄い色(桃・草・橙色)の符号を用いた。この分布地域は、東北およびその周辺のほか薩摩半島にも見出される。AKAI, AKEE などの語形は-K-の前後が広い母音であるため、有声化の観察に適している。なお、-K-の有声化については、ほかに4図および7図の説明をも参照されたい。

この図は連母音 AI の音変種をも詳しく示した。これを37図「甘い」や40図「辛い」などと比較すると、-AAの現われる地点が多い。これは語幹アカの独立性が、他とくらべて強いことと関係があるかもしれない。沖縄のAKAAは、沖縄形容詞語尾の法則に合わないため名詞と見なし、茶色の符号を与えたが、本土のAKAAの中にも、上述のように、同類のものも含まれるかもしれない。しかし見分けが困難であるためいちおう赤色の符号を与えた。

調査の際使用した赤い紙の色——「日本色彩研究所」の標準色「赤(Carmine Red)<色相・明度・彩度番号1-14-10>」——について、被調査者の反応が、単なるアカ～類ではなく、マッカ～類であった地点もあり、図でわかるように、この類にも形容詞形・形容動詞形・名詞形の別がある。そのほか、「茜」「赤茶」「薄茶」「海老茶」「樺色」などにあたる語も得られたが、地理的言語差とは考えられないので、地図では一括し「その他」としてとり扱った。参考までに、日本人男子の赤緑色盲(色弱も含む)の率を調べると4~4.5%という数字が現われる。しかし、この調査結果の中には、色盲のため混乱したと思われる回答はほとんどなく、おそらく調査者や同席者の適切な指示によってカバーされたのであろう。この事実と、全色盲、青黄色盲は非常にわずかであることから、27図「黄色い」の場合はほとんど問題がないと思われる。

なお、作図の際、併用の場合共通語と同形で<新><上><稀>などの注記のあるものは除く原則をとってきたが、この図の場合、形容詞形を求める目的があったため、他品詞形と併用されたアカイ類に<新><上><稀>などの注があっても、そのまま併用として示しておいた。

29. アカイを“明るい”の意で使うか

古典などによって知られる古い中央日本語では、「明るい」の意味に「あかい」という語形が用いられているが、この図では、滋賀・奈良などから西に、「明るい」の意味にアカイを使う地域が見出される。28図と対比することによって、西の地域では「赤い」と「明るい」を区別せずアカイと言うのに対して、三重・岐阜あたりから東の地域では、「赤い」をアカイと言い、「明るい」は別の語形を使って区別していることがわかる。

このように、この図は、巨視的に見れば東西にはっきり分かれていると言えるが、西日本でも、四国の2地域と、中国・九州のところどころにアカイを「使わない」地域がある。このうち、四国西部のものは、かなり広い領域を持ち、分布から言って固有の言い方ではないかと思われる。その他各地に点在するものの中には、共通語の影響によるものも含まれていよう。「使う」と「使わない」の両類の境界地帯では、その交錯の様子が、両者の闘争の複雑な歴史を反映しているようである。

いっぽう、東日本にも、アカイを「使う」ところが数か所ある。北海道内陸部に数地点あるもののうち、何地点かは西日本出身の両親を持つ被調査者による回答であるが、他方両親が西日本出身であっても「使わない」と答えた地点もあり、単純には割り切れない。山形に2地点あるものは、調査者の注によれば、AKARIIの子音が摩擦音化し、さらに脱落した[akai(:)]であって「赤い」の[ake]とは区別するという。したがって地図では「使う」の符号を与えておいたが、歴史的観点から言えば「使わない」の系統に属する。新潟・秋田などに点在するものも、あるいはこの類かも知れない。その他東日本に点在する「使う」の系統は明らかではないが、一地点ずつ孤立しているので、ここでは触れないでおく。

なお、作図にあたっては、被調査者・調査者の回答ばかりでなく、注記された語形をもととして、語幹がアカ〜であり、語尾が文法的に形容詞語尾(カ語尾を含む)であるものは、「使う」と認めた。ただし、沖縄では、文法的な形態のへだたりが大きく、しかも、被調査者または調査者の回答の基準が、必ずしも一定でないと思られるので、すべて空白とせざるを得なかった。ただし、若干の地点に関する、たとえば a:ka(0228.96), akasan(1242.26,

1261.70), akagain(1242.72, 1223.91), ahagato:N(1233.61)のような語形の注記を基準とすれば、対応から考えて前の二つの場合は「使う」、後の二つの場合は「使わない」と判定できる(語形の注記が全地点についていれば、全地域について判定できた)。

30. まぶしい(眩しい)—前部分—

「まぶしい」にあたる全国の方言語形は多様であり、しかも、前部分と後部分とが、おのおの別の分布を持つため、これを30図(前部分)と31図(後部分)とに分割して作図した。ある地点における完結した方言語形は、この図に示した前部分と、31図に示す後部分とを、一印を目安につなげば得ることができる。ただし、つなぐ場合、前部分の最後と後部分の最初の音節(または単音)が同じ場合、たとえば、前部分がMABA—、後部分が—BAIIならば、BAの部分が重複して示してあるから注意を要する(MABABAIでなくMABAI)。

30図を概観すると、東日本と西日本とに広く分布するマ〜の類が目立つ。紀伊半島・四国・西中国にはBA〜が分布するが、これはMA〜からの変化と考えられる。九州にはメ〜の類が分布する。これらは、ともに「目」に関係があらう。沖縄のMI—、MII—なども同様である。マ〜・メ〜の類の第2音節のうち、BA、MA、WA、HAなどは、じつは後部分「—はゆい」にあたるものの頭音と思われるが、後部分との関連を示すために、この前部分も重複して示しておいた。マ〜の類のうち、東北などに分布するMACU—のCUは、前部分に属するものとして、後部分には重複して示していない。

新潟を中心とする地方に分布するカガ〜の類は、「輝く」の語幹と関係があらう。この類は、やや離れて岐阜にも分布している。カガ〜の類にも、後部分の頭音を重複して示したものがある。

中部地方の太平洋側に分布するヒ〜の類は、「日」と関係があらう。中国地方にも、この類がいくつかの領域をもって分布している。この類も、後部分の頭音を重複して示してある。

四国東部・紀伊半島などに見られる語頭にA〜の現われる語形には、地図中、大符号を用いたが、例外として広島のABA—だけは、MABA—またはBABA—の

頭子音の脱落とみなして小符号を用いた。

沖縄の PIKA—(「光る」)に関係があるかと思われる)は、一般には MI-PIKA—のような語形として現われるので、後部分として扱うが、MI—の部分が欠けているもの、すなわち、PIKA—からはじまる語形の場合には、これを前部分として示した。

EZUI, HAGAYUI, KEBUTAI など特殊なものは、全語形を表示した。

標準語形 MABU—の分布領域は必ずしも広くはないが、東京を中心として現在各地に侵入しつつある様子を地図からうかがうことができる。北海道も、南部は東北と同じ MACU—であるが、新たに開拓された内陸部は、MABU—が勢力を持っている。分布地図をみると、東京を中心とする MABU—は、ある時代に近畿地方から侵入したものであろうと推定される。

31. まぶしい(眩しい)—後部分—

「まぶしい」にあたる各地の方言語形を、前部分と後部分に分割して示したことについては、30 図の説明の最初にのべたので参照されたい。

この 31 図における符号は、33 図「くすぐったい—後部分—」とほぼ共通にしたが、とくに、西日本で「はゆい」の系統かと思われる—B~, —M~, —W~, —H~, などの類に平行的な分布が認められる。中部地方などの—D~, —Z~の類は、ほとんど前部分がヒ~の類のものであった。その他の—K~, —G~の類は、いろいろなものを含むが、「苦しい」の系統のものも認められる。沖縄の—PIKA—の類は「光る」と関係があろう (PIKA—については、とくに 30 図と比較されたい)。

—B~類のうち、おもなものの分布について考察してみよう。西日本に広く分布する—BAII は、その中に点在する—BAYUIより新しく、また、近畿と瀬戸内海に分布する—BAI は、その西側あるいは周辺の山間部に分布する—BAII よりもいっそう新しいと考えられる。—BAYUI, —BAII, —BAI の分布は 33 図と共通するし、また 41 図「酸っぱい」における SUYUI, SUII, SUI の分布にも通ずる。さらに、近畿中心部から北陸にかけて分布する—BUI は、上記の—BAI をも周辺に追いやりつつある新しい勢力と思われる。30 図を参照すれば、近畿中心部から北陸にかけてのものは、MABUI と

いう語形であることがわかる。この MABUI をシク活用化したものが、近畿・北陸・長野などの一部、それに関東西南部に分布する MABUSII である。MABUSII の発生は多分近畿かと思われ、これが関東に移入され、現代の標準語として各地に侵入するようになったものであろう。

後部分の類のちがいは符号の色で示したが、後部分内で語尾の部分が、また独立した分布形態をとるものは符号の形の区別によって示した。

いわゆるシク活用にあたるシイ語尾(SII, SIIKA など)は、上記の MABUSII のほかは、秋田・山形・佐渡・能登を中心とした地方、山梨・静岡・山陰・中国地方山地・高知・西九州など、比較的辺境の地に多いことが目立つ。

ポイ語尾は、東日本に広く分布するが、直接前部分の MACU—, KAGA—に接続するケースが多い。このポイは分布からみて、西日本の—BUI などと直接の関係がないと思われる。西日本の—BOI は、—POI よりも—BUI の系統かと思われる。ポイ語尾の分布する地域の周辺部、秋田・佐渡・新潟富山県境・長野・山梨・千葉などに—POSII というシク活用形が分布している。

コイ語尾については、青森・秋田のものは、33 図とほぼ一致するが、中部地方では前部分・後部分の語類の分布と関係なく、あるまとまった分布領域を持ち、33 図よりもかなり範囲の広いことに注目される。

タイ語尾は、各類に接続してはいるが、33 図の場合と比べて、非常に勢力が弱い。

32. くすぐったい(擦ったい)

—前部分—

「くすぐったい」にあたる方言語形には、前部分と後部分とにそれぞれ別の分布が認められるので、これを 32 図(前部分)と 33 図(後部分)とに分けて示した。ある地点の完結した方言語形は、32 図と 33 図の語形を、一印を目安につなぐことによって得られる。ただし、この図の凡例中()に入れた部分は、後部分の語頭と重複して示したので、つなぐ場合この部分は無視する。

この図に示した「くすぐったい」の前部分は、擬態語のためか、ほとんど、K・M—S・C(T)—(—の部分は母音をあらわす)の子音およびその有声音または口蓋口音

と、母音UまたはOの組み合わせによる2音節からなる、と
 言うことができる。図に用いた符号は、子音の基本的な
 違いを色で、有声音、口蓋化音、音節の位置が逆になっ
 たもの、母音の違いなどは形で区別した。以下に、各語
 類の分布とその簡単な解釈を述べるが、このような擬態
 語に関する語形の諸変種については、地理的分布だけか
 ら解釈することは危険かも知れない。

K—S—(地図で桃色の符号)の類は、全国に広く分布
 し、そのうち、KUSU—とKOSO—がともに広い分布
 領域を持っていて、近畿中央部を起点として見ると、
 KOSO—の方が新しい勢力と考えられる。ただし、東
 日本では、東京語のKUSU—が、新しい勢力として各
 地に侵入しているようである。

K—C(T)—(地図で緑色の符号)の類のうち、中国の
 KUCU—には問題があるが、東北・中部地方北部・九
 州西部などにあるK—C—は古い形の残存のようにも思
 われる。一方、有声音のG—Z—、G—C(T)—など(地図
 で白ぬき符号)は、秋田・山形・北関東・伊豆半島付近・
 九州西端と南端に、また音節が逆になっているC—K—、
 Z—G—(地図で中ぬき大符号)が、北陸・隠岐・九州各
 地に、さらに、口蓋化音(地図でひげの出た符号)が東
 北の西部と北部・房総半島・北陸・近畿の山間部・九州
 などに分布している。これらは、いずれも辺境の地であ
 ることから、古い語形ではないかとも思われる。なお、
 関東北辺や、伊豆地方のKUZU—、GUZU—などのZ
 は、Cの有声音に対応するものとも考えられるが、周
 囲にKUSU—が分布するところから、Sの有声と見な
 して桃色の符号を与えた。

M—S(C)—、M—Z—の類は、北海道各地・東北北
 部・福島・茨城・佐渡・長野北部・東海・八丈島など、
 東日本の辺境に分布しているので、東日本における古い
 表現の残存かと思われる。これは、語形と意味から「む
 ずかゆい」「むずむず」などという擬態語との関係をうか
 がわせる。

M—の類は

- | | | |
|-----|---|----------------|
| (1) | { | MU-(MU)—TTAI |
| | | MO-(MO)—TTAI |
| | | MO-(MO)—KKAI |
| | | MO-(MO)—KKAYAI |
| (2) | { | MU—GUTTAI |
| | | MO—GUTTAI |
| | | MO—GOCCYAI |

- | | | |
|-----|---|-------------|
| (3) | { | MUGU—KAI |
| | | MUGU—KAYAI |
| | | MOGO—MACYAI |

のような語形の前部分であって、前部分・後部分の分割
 には、多少問題がある。

山梨・長野などに分布する(1)の類は、ほかに—BUT—
 TAI—などが分布することから、後部分をそれと平行さ
 せて—MUTTAI—などとすれば、前部分は(2)と同じと
 も考えられるが、後続音の違いと、擬態語的な畳音の可
 能性を示すため、前部分に第二音節までとり入れて(2)
 と区別した。

群馬、埼玉などに分布する(2)と(3)とは、前部分としては
 同じにすべきかとも思われる。しかし(2)の—GUTTAI—
 などは、その東に連続して分布する、KUSU—GUT—
 TAI—などとの関連があるのに対して、(3)は、—KAI—
 などならばほかに見出されるが、—GUKAI—などは他に
 まったく見出されない語形なので、上記のように分割し
 た。この地域における(3)のMUGU—などは(2)の類から
 変化の生じたものであろう。このM—の類は、K—S—の
 類と、K—C—の類との接触地帯に分布し、強力な両勢
 力の間に新しく発生した語形と考えてよからうが、その
 場合、付近に残存していた古いM—Z—の類が核となっ
 て発展した語形と推定される。

母音に注目すれば、若干のEやAがあるほか、一般に、
 関東を中心に、中部地方・東北南部・中国や西日本の太平
 洋沿いにUの系統(地図では円系統の符号)が分布し、そ
 の他の地域にOの系統(地図では長四角の符号)が分布す
 る。そして、第1音節がUのものはつぎもU、第1音節
 がOのものはつぎもOという場合が圧倒的である。おそ
 らく、母音の同化作用によるのであろう。さらに、33図
 とつき合せても、東日本では、Uの地域は後部分もGU—
 TTAI—、Oの地域は後部分もGOTTAI—など母音が同
 じものになっている。

凡例で、KOSA—からWAA—までは奄美・沖縄に
 見られるものである。このうちKOSA—は本土と同じ
 語形が発見されるので、符号も同じにしてある。また、
 GOZYAGAU—も、本土に類似した語形があるので、同
 じく緑色を与えた。その他は独特な語形であるため、茶
 色を与えた。UZA—以下は本土に見られるものである
 が、K—M—S—C(T)—などに属さない別の系統と思われ
 る。

33. くすぐったい(擦ったい)

—後部分—

前部分と後部分の分割については、32図の説明を参照されたい。巨視的に見れば、—K～、—G～の類が東日本・隠岐・九州西部に分布し、—B～、—M～、—W～、—H～におのおのA、Oなどの母音のついた類が、西日本と東日本の日本海側に分布している。この両類を比較すると、分布から見て、西日本に主勢力のある—B～などの類が新しいものと思われる。ただし、—K～、—G～の類のうち—GUTTAI は、現在、共通語形として勢力をのぼしつつあると言えよう。

—K～、—G～の類の中には—GUTTAI、—KUTTAIなどの類のほか、「かゆい」に由来する別系統の語形も含まれているようである。西日本の—B～、—M～、—W～、—H～などの類は31図に共通する語形があり、また、平行する分布が見られるので、符号としてほぼ共通のものを使用した。—BAI 対—BAIIの分布は、41図「酸っぱい」におけるSUI 対SUIIとも平行しているようである。

後部分は、まず頭音の別によって分類し、地図では色によって区別した。つぎに、それらの子音の変種やそれに連続する音の差などを色の濃淡や符号の形によって区別した。語形の諸変種間にもみられる体系性を符号でも平行的に示そうとしたが徹底しないところもある。これによって地図を見ると、上で問題にした頭音の類別のほか、語尾部分にも独自の分布のあることがわかる。

いわゆるシク活用にあたる～SII、～SIKA 語尾は、岩手・北陸・中部山地・山陰・九州など辺境に分布することが注目される。これらの語尾の分布は、—K～などの類、—B～などの類の区別を超越している。

タイ語尾は、地図で線系統の符号によって示したが、これも—G～の類と—B～の類の分布地域にまたがって関東をはじめ、東北や中部にまで及ぶ広い範囲に分布している。岩手と能登の—GASII、—GASUI は、古くは連続していたが、このタイ語尾の発展・侵入により分断されたものと思われる。この優勢なタイ語尾のうち、中部地方に帯状に見られる—BATTAI は、西の—BAIと東の—GUTTAIの接触により生じたものであろう。この地帯には、その他これに類する小変種が若干見出される。

コイ語尾は、北海道・青森などでは、MOCYO—KOI、MOZO—KOIなどという語形をとって、かなり見られるが、31図と比較すると、中部地方で勢力が弱い。

ポイ語尾は、31図と比べると、きわめて少なく1地点だけに見出される。

なお、偶然の一致かも知れないが、四国・九州と奄美に共通の語尾が認められるので、それを示すために、この図では例外として奄美・沖縄の形容詞語尾を最後の部分まで表わした（ほかに、奄美・沖縄の語尾を最後まで示したものに40図「辛い」がある）。

34. きなくさい(きな臭い)

—前部分—

「きなくさい」にあたる方言語形には、前部分と後部分とに、それぞれ別の分布が認められるので、これを、34図(前部分)と35図(後部分)とに分けて示した。

赤色の符号で示したカンコの類(ただし、コバケ・コオビを除く)が近畿を中心とした地帯に分布し、その西と東に、茶色と橙の符号で示したキナの類(ただし、T型、Y型で示したコゲ類を除く)が広く分布している。

これは、カンコの類が新しく発生したものであることを物語っている。モエ類とヤケ類は、発想法が似ているので、ともに緑色の符号を与えた。モエ・ヤケ類とカンコ類は複雑にからみ合って分布している。草色で示したイブ類と桃色で示したフスブリ類は、発想法が似ており、しかも東日本にイブ類、西日本にフスブリ類が地理的に補い合って散在している。そして、この両者は、36図「こげ臭い」においても、同様に全国に散在している(符号は36図と共通にしてある)。36図「こげくさい」における主力語形であるコゲの類も、この項目において全国に散在している。

キナ類のうち、KINA—など(HINA—,SINA—,CINA—も含める)は、北海道・東北・関東・近畿周辺部・九州北部に分布して古い表現かと思われるが、九州北部は、無回答も多い地域であるから、この地域に限り、共通語からの新しい採用かとも考えられる。もしそうなら兵庫・鳥取以西に、古くKINA—があったかどうかは不明ということになる。KINA—の類とKIGA—,KEGA—の類の歴史的関係は難しい。KENA—は、カンコ類に圧迫されて北陸や紀伊半島南部に後退したもので

あろうが、全国的な分布から KINA—よりは新しいと思われる。長方形で示した KIRIME—, KINNE—などは古いものであろう。十字で示した瀬戸内海の KINO-BORI—は新しいものらしい。ななめの矢印 KINOME—, 大きな丸で示した KEN'YA—などにも一定の分布がみられるが、歴史的説明は控えておく。

KAKO—とKANKO—とでは、分布からみてKANKO—が新しく、さらに言えば、KANKO—の中にKAN—が生じたものかと思われる。山陰には、KAKABI—などが、一定の分布をもって存在する。回答の注などによれば、これらは農村などで虫よけのため火をつけていぶす布切れの名称と関係のあることがわかる。紺色の符号で示したが、広島を中心として分布するボロ類も、発想法からはこの類と関係づけられよう。

ヤケ・モエの類一般は、分布からみて、キナ類より新しく、カンコ類より古いものと思われる。ただし、YA—はKANKO—より古いが、KAKO—よりは新しいらしく、単純には割り切れない。東海地方の様相からは、KAKO—, YA—, MOE—の順に発展したと考えられる。北九州や中国地方中部に分布するYAKE—は、YA—より辺境にあるから古い形のようにも思われるが、このあたりは36図「きな臭い」との区別のない語形や無回答の多いところであるから、前述のKINA—の時と同様、案外新しく発生したものかも知れない。たとえば、中国地方中部では、BORO—とYA—の接触地に、YAKE—というわかりやすい語形が発生し定着したことも考えられる。

「きな臭い」が、基本的な感覚ではないためか、安定した形容詞形の表現が得られず、一ガスル、一ノニオイなど、動詞形・名詞形の回答しか得られなかった地点もかなりあった。ただし、地図では、形容詞でなくとも、たとえば、BORO—, KANKO—などを含む形ならば、それらと同じ符号の肩に補助符号をつけて形容詞でないことを示した。凡例の「動詞・名詞」は、その他の前部分を持つ動詞・名詞であり、「その他」は形容詞に関するものである。なお、クサイだけの回答は40地点以上あったが「無回答」として扱った。

35. きなくさい(きな臭い)

—後部分—

この地図では「きなくさい」の「くさい」にあたる部分の

回答について作図した。おもな問題点は、複合語の後部分の「くさい」に促音を生ずるか連濁を生ずるかである。

まず、—KKUSAI—のような促音を生じているもの(地図中茶色の符号で示した)は、西関東と中部地方の東を南北に貫いて認められる。九州のカ語尾地方にも同様の特徴が現われる。新潟の一部に—KUSSAI—が認められるが、これは、以上のものと違い、複合語の構成とは無関係なものであろう。

—GUSAI—など(地図中赤色の符号で示した)の中には、Gについて、[g]・[~g]([ʔg])・[ŋ]の三種がある。[g]のうち、佐渡・愛知・西日本方面のものは—グサイ—に対応する。ただし、[g]のうち、秋田・山形のもの、28図「赤い」でわかるように、この地方では、語頭以外のカ行音が[g]となって現われるので、—クサイ—に対応するものとも思われる。しかし、また、秋田などでは、「ショオガツ」のGに[ŋ]でなく[g]が見られることから(6図を参照)、それと同じく、複合語の切れ目に[ŋ]でなく[g]が現われる現象の反映かも知れない。もしそうなら—グサイ—に対応することになる。高知・和歌山の[~g]、近畿から北陸にかけて、および青森の[ŋ]などは、明らかに—グサイ—に対応する。—NSAI—(1地点だけ)のNは、GU—からの変化であろう。

この質問項目(040番)に対して、ただクサイ(KUSAKA—も含む)だけの回答が、全国で40地点以上あった。これらは、複合語になった場合の姿を推定できないので、地図では「無回答」として扱った。

HINANKUSAI, KAGANKUSAI, KIRIMENKUSAI, CIRIMENKUSAI, KANKUSAI, KAKONKUSAI—などにおけるNは、前部分の名詞的要素の一部ないし助詞にあたると思われるので、前部分の方に入れてある。

後部分クサイまたはグサイのうち、全国にあるイ語尾の連母音—AI—にあたる部分の訛音、九州のカ語尾の—KA—, —GA—に関しては、他の形容詞項目の場合と平行する。ただし、他の形容詞項目と比べて若干異なるのは、複合語となって語形が長くなるためか、短音の地点が多いことである。すなわち、21図「粗い」、28図「赤い」、38図「甘い」、40図「辛い」などにおいては、—AI—や—EE—であった宮城・福島・新潟・長野・中国地方などで、この「きなくさい」の場合には—E—となっている地点がかなり見られる。母音の種類については、他の項目とまったく同じであるから、AI, EE, E—の区別だけを表わし

EE の中には, [e:] [e:] [æ:] のほか [ja:] [jæ:] [a:] など長音のすべてを含め, E にも短音のすべてを含めて作図してある。すなわち語尾の母音が [e:] か [a:] かなどの点については, この図によっては明瞭でないが, 40図「辛い」などを参照することによって見当をつけることができる。

36. こげくさい(焦げ臭い)

焦げ臭いにおいてもいろいろあるが, この項目の場合は, 御飯の焦げるにおいて限定して調査したものである。標題および見出しには完結した語形を掲げたが, 後部分は, 35 図「きなくさい」とほぼ同じなので, 地図では前部分の区別だけに注目して分布を示した。

前部分に関しては, コゲ～の類が広く分布し, ほか, コガレ～, コビ～, ヤケツキ～, ソコツキ～, ナベツキ～などの類もあるまとまった分布領域を持っている。

コゲ～類(KOGECKUKI～も含む)が中央日本に広く分布しているのに対して, コガレ～類が九州・奄美・中国地方山間部・山陰に見られるので, 西日本においては, コガレ～類はコゲ～類より古いものと思われる。コビ～類(KOBICUKI～も含む)は, 東北・中部のほか三重にもあるので, 少なくとも三重以東においては, コゲ～類より古いものであり, 近畿や関東から広まったコゲ～類によって, 現存の地域に後退させられたものであろう。

ヤケツキ～類は, 東北南部にまとまった分布をしているので, 比較的新しいものと思われる。おそらく, コビ～類が東日本に広く分布していたところへ, コゲ～類が侵入し, 接触が起こったところに新しく発生した語形であろう。同様に, 中国地方のソコツキ～, シケツキ～類も, コゲ～類とコガレ～類の接触地帯に見られる。コゲ～類のうちの KOGECKUKI～が分布する東海地方, コビ～類のうちの KOBICUKI～の分布する中部地方東側などが, やはり別系の勢力の接触地帯であることは, 注目すべきである。一般にこのような接触地帯では御飯の焦げた場合の表現として, 「～付き」という部分を加えることによって語形の意味を明確にし, かろうじて生き残ったり, 新たに発展したりする傾向があるのかも知れない。

中国地方などでは, 別系の勢力接触地帯に「無回答」がまとまった分布を示していて注目される。

各地点について, 34 図と対照すれば, 「きなくさい」

と「こげくさい」の区別の有無を知ることができる。なお符号の肩の補助符号, 凡例の「その他」・「名詞」・「無回答」などの扱いは, 34 図に準ずる。沖縄の NANCICI—KAZA は「なべつきーにおい」にあたる名詞形の回答である。「きなくさい」に比べると奄美などをはじめ, 全国的に形容詞形が多いと言えよう。

地図では示さなかったが, この項目の後部分の「くさい」について 35 図と関連させながら説明する。促音の入る～KKUSAI, ~KUSSAI の分布は, ほぼ 35 図と同じであるが～GUSAI の地点は 35 図と比べて非常に少なく, 石川に 7 地点, 高知に 1 地点だけである。すなわち, 北海道・青森・北陸・近畿など, かなりの地点で, 「きなくさい」の場合は～GUSAI, 「こげくさい」の場合は～KUSAI と言っていることになる。これは, 前部分との関係における構造的な差, 語の伝播経路の違いなどによろう。なお, カ語尾や, 語尾の連母音 AI の訛音については, 35 図とほぼ同じである。

37. あまい(甘い)

甘さにもいろいろあろうが, この質問文の場合は, 砂糖の味に限定した。

全国の大部分がアマイの類である。したがって連母音 AI の諸変種を全国的に見渡すこともできる。

ウマイ類(NMAI なども含む)が東北北部と鹿児島・奄美・沖縄にまとまりをもって分布し, その他のところでも主として辺地に散在している。

この地図と 38 図「く塩味がうすい」を対比すると東北北部や鹿児島では, 砂糖の味はウマイ, 汁の塩味の足りないことはアマイと言うことになる。なお, 質問番号 253 「おいしい」の地図(印刷では割愛)は, 全国にウマイ類(NMAI なども含む)が分布し, 関東から近畿にかけてオイシイ類が散在する。従って 37 図でウマイの地域は, 甘味と美味を区別しないことになる。これは, 日本における甘味料に関する食生活の発達と関係があるかと思われる。東北北部・鹿児島・奄美・沖縄その他辺地にある, 美味・甘味をウマイと言い, 薄味をアマイと言う表現は, 分布からみて古い段階かと思われる。

AMAKOI などが, 38 図に比べて, 東北地方などでかなり多くなっている(地図の符号は 38 図と同じく緑色にし

てもよかったが、分布状態をはっきり見せるため茶色にした)。この語形については、「強い甘さを表わす」などという注記がかなりみられた。調査の際の質問の順は「塩味がうすい」が先であって、そこで AMAI と答え、つぎに「砂糖の味」を問われて、なるべく区別したいという意識が働いたため、AMAKOI, AMACIKOI, SATOAMAI などと回答した場合もあろう。しかし、これらがあるまとまった分布を示すことは、やはり何らかの方言差を反映しているものと見てよい。

AMAKOI, AMAKEE などの -K- は宮城などの [k] のほか、新潟北部・秋田の [g] を含み、山形・岩手などの AMAGOI, AMAGEE の -G- は [ŋ] だけを含む。これは、音の対応関係を考えた処置である。九州西南端の [~ga] は ~KA に含めて示した。

38. <塩味がうすい>

汁の塩味が足りない状態を表わす形容詞は、共通語では「うすい」、「あまい」のいずれとも決めがたい点がある。すなわち「うすい」と「あまい」の違いは、「濃い」の反対ととるか、「塩辛い」の反対ととるか、という観点の相違に関係すると言えよう。しかし、一定の質問により得た回答を地図上に描き出すと、図のように、アマイ類、ウスイ類、ミズクサイ類などの分布地域がかなりはっきり見られ、それぞれの地域の言語の特性の反映と思われる。共通語形がひとつではないので、この図では、原則と異なり、併用の場合のウスイ類に共通語的であるなどの注記があっても、地図に併用として示した。

アマイ類は全国的に広く分布している。37 図でもアマイ類が分布し、この 38 図でもアマイ類である地点は、砂糖の味と汁の塩味の足りない状態とを、ことばによって区別しないことになる。なお、アマイ類の語尾の連母音 AI の音変種の分布については、37 図「甘い」や AI 語尾を持つ他の形容語尾の分布とはほぼ一致するので、ここでは細分することを省略し、すべて、AMAI にまとめて示した。

ウスイ類は、東北・中国・北九州にはほとんど見られないが、その他の各地にある程度まとまった分布領域を持っている。こまかくたどってみると、中心地から街道ぞいに全国に侵入しているようにも見える。しかも、ウスイ類とアマイ類との併用の場合、静岡ではウスイ類の

方が新しい表現とする注が多く見られた。このことから、ウスイは、アマイの領域の上に、広がりがつある新しい表現とも考えられるが、全国的に合計すると、両者の併用のうちウスイをより新しいとする地点とアマイを新しいとする地点とが、ともに 10 ほど数えられるので、全国的視野からはウスイが常に新しい表現とは言い切れない。ウスイと発想法の通ずるアワイ類が、近畿の北と南の辺地にあり、古い表現であることを思わせる。沖縄の APA—([apa][aΦa][aha]) 類もこの系統である。

近畿を中心に瀬戸内海・九州東部と南部に及ぶミズクサイ類は、ウスイとともに、砂糖の味と塩味のうすさを区別する地帯を形づくっている。分布状態からは、このミズクサイ類が、中央日本に発達したもっとも新しい表現と考えられるが、ウスイ類やアマイ類との併用の場合、ミズクサイ類の方が古いとの注記がかなりあって（その逆の注記はない）、ひと昔前は新勢力として発展したが、現在は、関東のウスイ・アマイ類の勢力に押し返されていると言えよう。なお、ウスイ・アマイ類とミズクサイ類との接触地帯（紀伊半島や、兵庫・岡山）では、ミズクサイの方が極度にうすい場合の表現であるとの注が 6 地点見られた。ミズクサイの語尾の連母音—AI の音変種は、この図では MIZUKUSAI に統合して示したが、35 図「きなくさい—後部分—」によって見当をつけることができるので参照されたい。

北陸のショムナイ類は、新潟のショッパイナイなどに通ずるとすれば、「塩もない」にあたるかとも思われる。これも、砂糖の味と区別する点では、近畿・福井に連続する。この類は他地域に見られない独特の表現である（なお、39 図のクドイ類の分布と比較されたい）。

九州のサビナイ類 (SABINAKA を含む) は、アマイ類 (AMAKA も含む) と併用されているうち 7 地点で、塩だけでなく、味の利いていないこと一般に用いるとの注記があった。これは、いままであげた他の語形と異なって、無味を表わす広い意味分野を表現する語と考えられる。三陸・三宅島のマズイ類も似たものかも知れない。

以上により、砂糖の味と塩味のうすさを区別する地帯が、近畿を中心に北陸・四国・九州の一部・関東・東北に及んでいることがわかった。分布からみても、このように区別することが、日本語における新しい言い方であろうと思われる。ただし、砂糖の味と塩味のうすいことを区別する地域の中にも、甘味と美味とを区別しない東北

北部と鹿児島が含まれ、この体系こそが、味を表現する語としては最も古いものであろう(中央日本では、甘味・塩味のうすさ・美味を、それぞれ別の語で区別する)。

SION-AMAKA の N は助詞の「の」にあたると思われるから、語をとりあげる場合は AMAKA に統合すべきかも知れないが、付近に SIOAMAKA が分布しているので、それとの関係を見るため、地図では補助符号を肩につけて AMAKA と区別した。そのほか、若干ある MISON-USUKA, SIOKEGA-USUI などは、主語部分にあたると思われるものを切り捨てて作図した。アジガキイトラン・シオガキイテナイ・シオガタランなどは、「その他」として一括した。

なお、「塩の味」そのものについては、つぎの 39 図「塩辛い」で示す。ただし、「塩味が濃い」でないことと、質問に際して汁の味に限定しなかったから、厳密な意味での対義語とは言えない。

39. しおからい(塩辛い)

調査したのは、「塩の味」であって、塩そのものをなめた場合の感じのほか、海水・汗・涙などの自然物、料理などの加工品の場合をも含み、また、薄めの味も濃い味をも、含んでいる可能性がある。

シヨッパイ類は、いわゆる親不知・浜名湖線の東にあり、典型的な東日本型の分布を示している。ただし、西日本の山間部に点在する SIOHAI, SIWAI も、このシヨッパイ類と考えられる。

カライ類は、シヨッパイ類に対立して、西日本に分布しているが、東日本の関東南部などにも分布していて、注目される。関東南部などで、シヨッパイ類よりカライ類を上品なことばとして使うとの注記が多く見られ、これは、上方からカライ類がある時代に、新しい勢力として侵入したことを示すものであろう。そのほか、佐渡・長野南部などに見られるものは、海陸の交通路によって運ばれたものであろう。九州西部の KARUI, KARUKA, KAKKA はカライの変種と思われ、九州南部の KARI, KARIKA, KAI, KAIKA も同様であろう。このカライ地域は、40 図と対比すればわかるとおり、唐辛子の味と区別される表現を持たない地域ということになる。

シオカライ類は全国的に散在するが、新潟・富山・南

関東・近畿・四国北部・大分・沖縄などでは、ややまとまった分布領域を見せている。前述のように、カライ地域では、元来唐辛子の味と区別がなかったため、おそらく近畿地方あたりで、とくに塩の場合はシオカライと言って区別する傾向が起り、その語形が北陸地方や西南へ、さらに東海から関東へと侵入したのであろう。西日本でこの語形がカライ類と併用された場合、唐辛子と区別して特に塩による辛さに限定する場合に用いるとの注記が多かったことも、発生の様相を示していると言えよう。もっとも、煮物や漬物はカライ類であって、塩そのものをなめた場合は、シオカライ類であるとの注記も若干見られた。伊豆地方などの SYOPPARAI はシヨッパイ類の地域に、シオカライ類が侵入したため混交を起こしたものであろう。長野の SIOZYOPPAI はシヨッパイについて、塩の意識が薄れたことと、シオカライという語形の影響などが考えられよう。

クドイ類は、北陸地方にまとまった分布領域を示すが、分布および注記からみて、カライ類より新しく発展したものである。これも、シオカライ類と同様に、唐辛子の味をあらわすカライ類と区別しようとして、他の意味分野をさすクドイ類を転用したものかもしれない。ただし、注記の多くは、〈クドイは汁の塩味の場合〉とあるところを見ると、区別のしかたが、近畿のカライ類対シオカライ類とは若干ずれ、唐辛子や塩そのものの味に対して汁などの塩味を区別するために使われ始めた表現かもしれない。なお味の濃さ(しつこさ)に関する諸表現、薄さ(淡白さ)に関する諸表現を関連させて調査すれば、いっそう深い解釈に到着できるであろう。

九州にある SIONKARAKA などの N は、助詞の「の」にあたると思われるので、語としてとりあげる場合は、KARAKA に統合すべきかと思われるが、付近に SIOKARAKA なども分布しており、それとの関係を見るため、地図では補助符号を肩につけて KARAKA と区別した。

この項目は、いちおうシオカライを標準語と認め、併用の地点でシオカライに共通語的であるなどの注記がある場合地図から除いた。

40. からい(辛い)

全国一様にカライ類(九州の KARUI, KARUKA,

KAIKA などを含む)が分布しており、39図と対比すると、西日本では、塩味と唐辛子の味とを区別しないで表現することがわかる。もっとも、唐辛子の場合、ナンパンカライ・トオガラシカライ・コシヨオカライなどの複合語(ナンパン・コシヨオは各地の唐辛子の方言)を使って区別している地点も若干見られる。これは、37図におけるサトオアマイなどに、また、39図におけるシオカライにも通ずる命名法である。ドンガライなど接頭辞のついたものは、辛さの程度の強い場合に使うようである。

八丈島の PAREROWA は動詞「腫れる」にあたる語形であろう。AMAI については、疑問もあるが、いちおう地図に示した。

このように、全国で語幹部分がほぼ一定なので、この地図は、形容詞語尾の分布を見るに好都合である。本土では、カ語尾の分布するところ以外で、語尾の連母音 AI にあたるものの音変種の分布が詳しくわかる。調査者の表記法の差などを考えて、地図では -AI, -EE, -E, -YAA, -YA, -AA にまとめて示したが、そのうち、-AI, -EE, -E については、おのおのつぎのような音変種を含んでいる。

-AI	{	[ae]	東北・茨城・新潟・長野東北 部・島根東部
		[æi]	鳥取東南部・鳥取西南部・岩 手の一部・青森の一部
		[ai]	以上のほかの地域
-EE	{	[ɛ:]~[æ:]	宮城・福島・新潟・千葉東端・ 静岡東部・名古屋市付近・京 都西北端・兵庫北半・岡山・ 対島
		[e:]	以上のほかの地域
-E	{	[ɛ]~[æ]	青森・岩手・秋田・山形西北 部・鹿児島・宮崎南部
		[e]	以上のほかの地域

他の項目の形容詞語尾 -AI, -EE, -E に含まれる音変種もほぼ上記と同じである。

沖縄も語幹がほぼ一定であるから、語尾の分布がすべてわかるよう作図した。他の形容詞の語尾分布も、語による違いがないではないが、ほぼこれに近いので、語尾を求める場合は、この地図を参照されたい。なお、各語におけるの語尾の詳細は、「日本語地図資料」に示してある。

41. すっぱい(酸っぱい)

調査の際の質問は、酸味一般ではなく、「梅干しの味」に限定したため、報告された語形について、青梅・みかん・酢などの味には使っても、梅干しの場合には使わないという注記があれば、地図から割愛した(詳細は「日本語地図資料」に示す)。

スイ類が中部地方から西に分布するが、この中でも、中部・近畿・四国の一部などの SUI と、それから西に分布する SUII とに分かれ、SUII の地域の中には、その原形かと思われる SUYUI が点在している。鹿児島島の SUI は、系統としては SUII のものが、長音を短音に発音する地帯のために SUI になったものであろうか。富山・愛知・山陰・沖縄の SII は SUI に対応する音である。SUYUI, SUII, SUI の関係は、31 図「まぶしい-後部分」に現われる -BAYUI, -BAII, -BAI などと平行する。

スッパイ類は南関東を中心に東西にのびている。静岡などに SUPPOI が存在することは、このスッパイ類の侵入と関係があるとも考えられる。標準語では、「酸い」が文語的、「酸っぱい」が口語的であるが、この分布図によっても、東京付近の話しことばは、スッパイであることがわかる。

スッカイ類は、東北から北海道南部・新潟・関東東部に分布し、このうち K の部分の促音の有無についても地域差が見られる。

質問を、梅干しの味に限定したためか、その酸味でなく、塩味や渋味にも着目したと見られる回答がいくらかあった。上記のスイ・スッパイ・スッカイの類のほかに、ショッパイ・カライ・クドイの類など、39 図の塩味の場合と共通する語形である。これらの地点の多くでは、みかん・青梅ならば、スイ、スッパイ、スッカイと言うとの注記があった。ただし、関東中央部にまとまって分布するショッパイだけは、梅干しの酸味に関する表現らしく思われる。この地域について 39 図と対照してみると、塩味はカライ、シオカライと言い、梅干しの場合ショッパイと言う地点がかなり認められる。この地域に塩味を意味する新しいカライ・シオカライ類が侵入したため、本来塩味を意味していたショッパイ類が、意味のややずれた梅干しの味に転用されるようになったものと考えられる。

シブイにあたる SIBUI, SIBUKA が五島などにあるので、付近に分布する SYUUKA もこれと関係があるものかも知れない。沖縄の SIB— も、あるいはシブイの系統かもしれない。

スイ・スッパイ・スッカイの歴史的な関係を、分布によって、推定すれば、次のようになる。古くはスッパイはまだ存在せず、二大勢力であるスイと、スッカイとが関東西部で接していた。このため、この地帯で不安定な状態が生じ、隣接する意味分野を表わすショッパイが触媒となってスッパイという新しい語形が生じ、それが中心地のことばとして周囲に発展したのではないか。

なお、作図の場合、スッパイを共通語と見なし、併用の場合、原則によって共通語的であるなどの注のあるスッパイだけを地図から割愛した。スイの場合は新しい言い方などの注があっても、併用として地図に示した。

42. 恐ろしい

「恐ろしさ」という感情にもいろいろな種類や程度があり、種々の類義表現を想定できるが、この場合は、質問文のように、「犬にかみつかれそうになった場合の気持」に限定して描いた。

全国を大観すると、オソロシイ類が西日本の辺境地帯、オッカナイ類が東日本の全体に、そして東京付近や近畿地方にコワイ類が分布して標準語成立の歴史をうかがわせる。東京で、「おそろしい」がやや文章語的、「こわい」が口語的、「おっかない」が俗語的な感じがするというのも、この分布からうなづけよう。中部から関東にかけてのコワイ類・オソロシイ類は西日本からの侵入と考えられる。近畿地方における分布から見ると、オトロシイ・オソロシイ類とコワイ類とでは、コワイ類が新しい発展と思われる。

そのほか、名古屋および佐渡地方にオソガイ類、中国にキョオトイ類、東九州・島根・北陸の一部にオゾイ類、広島・島根県境にイブセイ類などがまとまった分布領域を持っている。

北九州にエズイ類が分布する。これはオゾイ類と関連があろう。両者は、分布から見て西日本における古い言い方かと思われる。

奄美・沖縄の GWA— はコワイに、UTUR— はオトロシイにあたる語形であるが、NUGUR— などは本土に

対応形が見あたらない。なお、タマゲルなどの動詞形は「その他」として扱った。ただし宮城・岩手の DOOTEN-SITA (動顛した) だけは、ある分布領域をもつので、いちおう地図に表わした。

1 地点に 2 語形併用の場合、中国地方では、オソロシイが恐怖の強い場合、コワイ・イブセイなどは程度の弱い場合に使うという注記が数地点あった。東北ではオッカナイを程度の強い場合、コワイを弱い場合に使うと注記した地点も、わずかではあるが見出された。なお、この項目の標準語形は、オソロシイ・コワイの二者と思われるので、これらの語が他の語と併用されて新しい表現などの注記のあるものは、地図から割愛して単用として表わした。そのうちわけは、コワイ 35 地点(オッカナイとの併用 27, オトロシイとの併用 8), オソロシイ 3 地点(いずれもオッカナイとの併用)であった。

43. コワイを“恐ろしい”の意味に使うか

この図で「使う」ということは、質問内容からみて、42 図の場合にコワイを答えたことに相当する。しかし、42 図におけるコワイの分布に比べて、この図では、コワイを使う地域の範囲が広がり、地点も非常に多くなっている。42 図では示していないが、コワイを共通語的になどなら使うという注記のあるものが 35 地点であった。この 43 図では、「共通語的になら使う」という地点が、ぬき三角形(輪郭のみ)で示したように、その 5 倍ほどの数にものぼっている。この符号は 42 図においてコワイの分布していなかった地域に見出される。同じ内容でありながら、42 図の場合と 43 図の場合とがこのように相違するのは、前者がなぞなぞ式質問による結果であり、後者が誘導式質問による結果だからであろう。このことは、言語を使用するといってもいろいろな段階があって、調査のし方に注意を要することを示している。ちなみに、質問番号は、42 図のものは 237 番、43 図のものは 206 番であって、連続させず、内容に相互影響はなかったと考えられる。

なお、この 43 図は、コワイという共通語形が、現在他の語形を圧倒しつつ文化の中心地帯に盛んに用いられている様子をよく示している。中部地方の「共通語的ならば使う」の地域を入れれば、南関東と近畿地方とが

連続する。

地図の整理にあたっては、29 図と同じく、被調査者の「使う」「使わない」と言う答えをそのまま採用せず、それに加えられた注をも参考にして、「使う」「使わない」を決定した。音韻的・文法的な変形をうけていても、コワイに対応するものであれば「使う」と認めた。

44. コワイを“疲れた”の意味に使うか

疲労感にもいろいろあるが、この質問では、重い荷物を背負って歩いた場合の感じについて回答を求めた。したがって、その他の疲労たとえば精神的な疲労、病的な気だるさなどについて調べれば、また違う結果が出るかと思われる。

「コワイ」を使う地点は、東北およびその周辺地帯・紀伊半島・中国西部・九州南部などに分布する。これを 43 図に重ねてみると、両図で、コワイを使う地域がほぼ補い合っていて重ならないことに注目される。共通語と同じ恐ろしい意味の「コワイ」が各地に広まる場合、疲れた意味の「コワイ」が元来分布している地域にはなかなか侵入しにくいことを示していると言えよう。

「使わない」地点のうち、それでは疲れた場合に何というかは特に調査しなかった。調査すればよかったと思うが、そのことに関して好意的に情報を寄せた 160 地点からの報告についておもな傾向を拾うと、全国一帯にツカレタ・クタビレタ・クタブレタがあり、タイソオダが佐渡島、ナンギダ・ナンギイが新潟、テキナイ・ゴシタイが長野、エライが静岡・近畿・中国、カッターイが南関東、カイダルイが紀伊半島、シンドイが近畿・瀬戸内海、ダレタが四国・九州、シワイ・セツイが島根などに見られる。

なお、「使う」「使わない」の判定については、43 図の場合に準ずる。

参考までに、「餅が固くなった場合にコワイを使うか」(質問番号 205)について作図したものについて述べる。まず東北・四国・沖縄に「使わない」が多いほか、ほぼ全国的に「使う」が散在する。しかし、あまりはっきりした分布が見えなかったし、飯やするめなどではなく、餅と限定したことに問題があるので、印刷は割愛した。

45. いい<天気だ>

この項目の場合は、形容詞の連体形を求めた(26 図と同様)ため、原則として、「天気がいい」「上天気だ」などにあたる回答の場合は、地図で「その他」として扱った。

全国を概観すると、北海道・東北で II と EE が入り混じり、つぎに II, 西日本に EE, ふたたび九州東部・沖縄に II が分布する。九州西部は YOKA であり、これに対応する YOI は全国的に点在するほか、北陸・近畿北部にまとまった分布領域を見せる。なお、この地図は語形の系統を考えて分類したのではなく、現在使用されている語形の音の類似によって分類したものであることを断わっておく。

II [i:] には、東北北部・北陸などの中舌母音 [i:], 東北中部南部・新潟の [i:] も含めてある。奄美・沖縄の II [ji:] は、じつは II に対応するものでなく、本土の EE または YOI, YUI (この語形は見出されていない)に対応するものと思われ、しかも、この語形は、形容詞形ではなく、連体詞的なものと考えられる。地図では、ほかに [j̄zi:] [si:] [ri:] を区別して示したが、この三者は、分布も隣接し、音声的にも近いものと思われる。

EE は、地図ではまとめたが、西日本のものと東日本のものと、音韻としては性格が異なる。西日本のものは、イとエとの区別があって、しかも EE であるのに対し、東日本および出雲地方のものは、イとエの区別がなく、エに統合されているところでの EE であって、イイの系統かエエの系統かは決めがたい。分布をみると、西関東・長野・新潟西部まで II であって、ここから東の区別のない地帯に入ると EE であることから、イイが EE として現われたものかと思われる。しかし、宮城・山形・福島などの [j̄ze:] は、イにあたるものには現われず、エにあたるもの一部の語に現われる音であるから、この付近のものはエエの系統かとも思われる。

YOI, YOE は各地に散在し、改まった言い方としてならば、広く使われているものらしい。ただし、北陸・近畿北部にまとまって分布するものは古い語形の残存と思われる。九州でヨイ類の YOKA がまとまって分布しているのは、カ語尾のために母音の融合が起きず、YO— が保たれたことを示すのであろう。20 図「太い」などにおける語尾の連母音 —OI にあたるものが —EE

などになっている地域と比較すると、この図の EE, II の分布とは一致していないので、YOI が EE や II に変化したにしても、音韻法則によるものではなく、個別的变化があったものかと思われる。なお、他の形容詞項目一般に比べて、この地図はカ語尾が九州南部において東に張り出している注目される。このようなカ語尾の分布を示すものは、この日本言語地図においてはほかに質問番号 269「ない」(分布地図の印刷は割愛)の NAKA ぐらいしか例がない。「よい」「ない」においてカ語尾が優勢な原因は、音節数とか、使用頻度とか、いろいろ考えられよう。このほか、27 図「黄色い」における KIIROKA がこれらに準ずることはすでにのべた。

46. <いい天気>だ

いわゆる断定の助動詞にあたるものについて地図を描いた。ダが東日本と山陰に、ヤが北陸・近畿に、ジャがそれ以外に分布している。これは、国語調査委員会「口語法分布図」19 図(明治 39 年)とほぼ一致するが、鳥取と兵庫北部がダであること、ヤの専用地域が明確になったこと、九州西部に助動詞が見えないこと、沖縄をはじめ離島の資料が得られた点など相違がある。

新潟の RA は音韻的にダに対応する。北陸・近畿などの YA が ZYA から発生した新しいものであることは、分布からもまた音声的な性格からも断言できよう。ただし、併用地点が少なかったため、YA と ZYA の新古に関する注記は得られなかった。九州西南端の YA は中央語からの影響でなく独自に音声変化をしたものかも知れない。九州南部の ZYAT, YAT は [3aʔ] [jaʔ] などの音声をあらわしたもので、「ジャル」「ヤル」に対応する語形と考えられる。沖縄の YAN などは「ヤル」に対応すると思われる。ジ [3i] とヂ [dʒi] を区別する高知に ZYA [dʒa] が見られることは、西日本に分布する ZYA が古い日本語の「ヂャ」に対応することを正しく示している。

この地図では、名詞の「天気」に終助詞ゾオ・ドオ・ノオ・ノマイ・ナア・ナイ・ニャアなどのついた報告があった場合は、それらを切り捨てて、「助動詞なし」として扱ってみた。ただし、九州のバイ・タイだけはまとまった分布領域が見られ例外として地図に示した。助詞と見

なして切り捨てたものの中に、じつは断定・陳述の働きを持つものがあつたかも知れないが、いま明らかではない。また、「だ」にあたるものつぎに終助詞がついて報告されたものは、終助詞部分を切り捨てて作図した。文末終止以外の場合を調べれば、また違った結果が得られたかも知れない。ていねい表現の「です」「でございます」にあたる表現は、「その他」として扱った。

このほか、質問番号 277「火事だ」の「だ」について作図したもの(印刷を割愛)は、KA—の音声に注目する項目であったため「だ」の部分の報告に完全でないものがあったり、火事という場面の性格上、名詞の言い切りであったりしたが、ほぼ 46 図の分布と一致する。ただ、熊本に 2 地点ダが現われ、その点、国語調査委員会の分布地図に通ずる。

47. <虹が>きれいだ

「きれいだ」にあたる意味範囲はかなりとらえにくい。この項目は、虹を見た場合の感情に限定して調査した。

共通語では、「きれいだ」と「美しい」の両方が用いられ、ニュアンスの違いがあるらしい。この質問では、キレイダ(ジャ)とウツクシイの両語類をあげて選ばせたもの(C式質問)であるが、分布地図を見ると、両者が別々の地理的分布を持って全国に広く見出される。そのほか、ミゴト〜ケッコオ〜リップ〜キヨラ〜などの類も独自の分布領域を持って現われている。もし、なぜなぞ式質問をとっていれば、キレイ〜類、ウツクシイ類がもっと少なく、そのほかの語形がもっと多くの地点に現われたかも知れない(質問形式の違いによって現われる回答の差の例は、多少問題が異なるが 42 図と 43 図を比較されたい)。なお、奄美・沖縄に分布する凡例の KYORA—から SURA—までは「清ら」にあたるものと思われる。また、KAGI—, KAI—は「カゲ」に対応すると考えられる。この図では以上のような語類の違いを符号の色で示した。

つぎに文法的な問題をのべる。品詞の別や活用語尾は色に関係なく、符号の形によって示したので、つぎにそのおもな規則をしるす。

[形容詞] <イ語尾> 山型(—INAは横向き)

<カ語尾> 円

〔形容動詞〕 <ダ語尾> つぶし三角

<ジャ語尾> 上ぬき三角

<ヤ語尾> 上ぬき三角のさかさ

<ナ語尾> いちょう型

〔語幹だけ〕 T印

26 図「四角い」、27 図「黄色い」の場合も同様の扱いをしたので、参照されたい。形容動詞のダ語尾、ジャ語尾、ヤ語尾の分布は、46 図「<いい天気>だ」と平行する。中国・四国の -NA は、終止法に使われている点注目される。ただし、この中に語幹または終止形に終助詞の「ナ」がついたものが含まれているかも知れない。なお、凡例で示した部分は、沖縄における形容詞形語尾である。

この項目は、意味範囲の切り方が限定的であったため、語類の分布がこのようになった面があるかも知れないが、48 図もこれに似た分布を示すので、虹の美しさに限らずかなり安定した言い方かとも思われる。しかし、質問の形式からみても、純粋な方言の反映というより、標準語の問題を考えるさいの参考になる面が大きいと思われる。

48. きれいに<掃除する>

この地図では、部屋を掃除した場合の「きれいに」に限定した。質問形式は 47 図の場合と同じ C 式である。しかし、連用形を求めたことに特色がある（ただし語幹部分の分布は、ほぼ 47 図と一致した）。

語類の違いは 47 図と同じ色により区別した。しかし、両図をくわしく比較すると、やはり若干の差が見られる。すなわち、分布については、47 図に比べてウツクシ～類が東北では少なくなり、かわりにサッパリ～類が岩手・宮城にある分布領域を示し、また、ウツクシ～類 (UCUKUSYUU) が美濃にまで進出している。東海地方のケッコオ～類も地点が増加しており、リッパ～類、ミゴト～類にも多少の差が見られる。このような差は、虹の美しさと掃除をした場合の清潔さを言い分ける方言の存在を示すことになる。

品詞の別と活用語尾を示す符号の形に関する規則をしるす。

〔形容詞〕 <ク語尾> 馬てい形の下あき

<ウ語尾> 馬てい形の上あき

〔形容動詞〕 <ニ語尾> 矢印 (47 図では長四角)

このほかの符号は 47 図と共通である。

47 図と比べると、同じ語幹でありながら品詞の違い地点、また品詞が同じであっても活用語尾が共通語の終止形に対する連用形の関係と異なる地点、たとえば、連用形であるのに終止形的な語尾が現われたりする地点などが見出されて注目される。形容詞ウツクシ～類におけるウ音便の分布は、国語調査委員会「口語法分布図」27 図 (明 39 年) に矛盾はしないが、この調査では、なにぶん該当する地点がまばらである。ウツクシ～類の中には、終止形に似た UCUKUSI という形が多く分布している (このうち、九州の 10 地点全部、近畿のうち数地点は長音の [utsukuji:] である)。これは語幹をそのまま副詞的に使ったもの、または、形容詞の活用が退化して終止形を連用修飾にも使ったもの、などとも考えることができるが、ウ音便地帯のものは、UCUKUSYUU からの音変化とも考えられよう。沖縄の語尾は、たとえば CYURAKU、KYORAKU のような形容詞連用形をとるもののほか、KYORASAN のように終止形と同じ形の報告もかなりあったが、各地点の具体的な語形は「日本語地図資料」にゆずる。

なお、この項目について、質問形式と資料の性格などの点は 47 図と同じである。

49. いくつ (個数)

個数をたずねる語について調査したものであるが、その内容は、50 図「いくら」(値段) と関係があり、地図における符号も共通させてあるので、50 図およびその説明を参照されたい。なお、助詞・助動詞・動詞などのついている回答は、その部分を切り捨てて扱った。

巨視的には、東北と西日本にナンボの類が分布し、関東・中部・近畿の一部にかけての一带と、九州・沖縄にイクツの類が分布していると言える。詳しく言えば、西日本にもかかわらず、高知にイクツの類が、また九州西部と種子島にイクラの類が、九州南部にドシコの類が分布する。なお、イクツ類はナンボ類の領域に、また、ナンボの類はイクツ類の領域内にも点在する。

ナンボ類の分布地域は 50 図の場合にほぼ一致するが、それよりやや領域がせまい。NAMBOO という変種の分布は、50 図と平行する。

イクツ類の分布は、50 図におけるイクラ類の分布と似ているが、九州西北部・近畿の東部南部では、やや優勢と言えよう。IKUCU の中には、東北などに見られる [ekutsū] [egudzū] [igūdzū] などの音変種を含めた。ただし、「ツ」にあたる音は、高知・大分・紀伊半島・山梨西部などで [tu]、鹿児島で [t] [ʔ]、沖縄で [tʃi] などであって、これらの音変種を表わすため、それぞれ、IKUTU, IKUT, IKUCI という見出しを立てた。GYUUCI, HYUUCU, YUUCU, UCCI などは、イクツの変種と考えられる。

イクラ類は九州西北部に分布し、50 図の場合と矛盾がない。IDDA はイクラの変種と考えられる。

ドシコ類は 50 図の場合と比較すれば、分布領域は一致するが、イクツ類などといりまじることが多く、専用地域が鹿児島西北部にしか見られない点で相違する。ドシコ類は DOSIKO のほか、DORESIKO, DOGASIKO などを含み、発想法から言って、他の地域に見られるドレダケ・ドノクライ類と共通する。九州におけるドシコ類とドノクライ類の分布が連続していることも、両者の関係を裏付けていると言えよう。

ナンボ類とイクツ類などの勢力関係を地域別に考えてみよう。紀伊半島では、分布のうえからも、また併用の場合、ナンボ類が新しいとの注記があることから、ナンボが、新しい勢力として侵入しているものと思われる。ただし、大阪付近のイクツは、さらに新しい標準語の侵入であろう。

中部地方の併用地点では、ナンボが新しいとの注記と、イクツが新しいとの注記（地図ではナンボの単用として扱った）とが同じくらいの量で見られる。すなわち、この地域では、両類が同等の勢力を持っているらしい。佐渡の NANCU は、NANBO と IKUCU の混交形かも知れない。秋田の NANBOCU も関連させて考えるべき語形である。東北では、南からイクツ類が北進しており、北海道では内陸部に新しい勢力としてのイクツ類が分布している様相を読みとることができる。

九州東部のナンボ類とイクツ類では、併用の場合イクツ類が新しいとの注記が多く、ドシコ類と領域を重ねるイクツ類（主として IKUT）も、新しい侵入と思われる。結局、北海道・東北・近畿中心部・九州では新しい勢力としてのイクツ類が分布するということになる。しかし、大局的に見た両類間の関係の説明は保留したい。

なお、年齢をたずねる語（質問番号 014）についての分布地図は、ほぼこの図と同じ結果を示したので、より基本的と思われる個数の図によって代表させ、年齢の方は印刷を割愛した。ただ、年齢の場合、49 図と比較して、九州のドシコ類および全国的に散在するドレダケ・ドノクライ類の勢力が弱く、個数の場合の三分の一程度の地点にしか認められなかったことを付記しよう。これは、質問の際設定した場面による違いではないかと思われる。

50. いくら（値段）

値段をたずねる語について調査したものであるが、その内容は、49 図「いくつ」（個数）と関係があり、地図における符号も共通させてあるので、49 図およびその説明を参照されたい。なお、助詞・助動詞・動詞などの付いている回答は、その部分を切り捨てて扱った。

巨視的には、東北と西日本にナンボの類が分布し、関東・中部・近畿の一部・九州西部にイクラ類が分布すると言えようが、イクラ類はナンボ類の領域内に点在し、一方ナンボ類もイクラ類の領域内に点在する。そのほか、ごくわずかではあるが、全国にイクツ類が点在する。また、九州西南部にドシコ類が分布し、沖縄には別系の語が分布する。

ナンボ類が、山梨を中心とした地方に孤立して分布することが、49 図と比較してまず目につく。また、西日本のナンボ類は、49 図と比較して、東側では紀伊半島・滋賀・北陸などにおいて張り出しており、西側でも、高知と大分などでイクラ類を圧している。なお、NANBOO が中国に分布する点は、49 図と一致する。

イクラの類は分布が非常に広く、49 図で分布していた九州西北部のほか、イクツ類地帯のほとんど全部におよんでいる。IDDA は、イクラの変種と考えられる。

ドシコの分布領域の範囲は、49 図と同じであるが、他語形との併用が少なく、専用地域がかなり広い点で相違する。

沖縄では、49 図のイクツに対して、それと区別のあるさまざまな語形が分布している。

ナンボ類とイクラ類などの勢力関係を考えてみよう。紀伊半島では、49 図の場合よりかなり多くの地点で、併用の場合ナンボ類が新しい表現であるとの注記が見ら

れ、また、北陸・滋賀・熊本を中心とした地方にも、併用の場合やはりナンボ類の方が新しいとの注がある。分布領域の広さからみても、とくに値段の場合に、近畿地方周辺部にナンボの勢力が伸展していることは、大阪を中心とした商業圏の勢力と関係があろうか。東日本では、49図の場合と同様、併用の地点でナンボ類が古くイクラ類が新しいとの注記が多く(イクラ類が新しいという注記のある場合、原則にしたがって、そのイクラ類は、地図に記載しなかった。詳細は「日本言語地図資料」参照)、関東から東北の太平洋側にはイクラの侵入の姿を見ることができる。また、北海道の内陸部にも新しいイクラが分布している。

さて、最後に、49図(個数)と50図(値段)とについて、各地域で別語形を答えているか、同語形を答えているか、すなわち、両図間の区別という観点から、その歴史関係を考えてみよう。東北では区別をしない。関東・中部から近畿の東部と南部では区別する。近畿中心部・中国・四国・九州東部にかけて区別のないところが多い。九州では西部は区別しないが、残りの地域は区別したり

しなかったり、さまざまである。沖縄はほとんどが区別するが、しない地点も点在する。以上をまとめると、区別のない地域が東西に分離しているのに対して、関東から近畿東部南部にかけて、区別する地帯が連続していることになる。このことから、区別することは新しい現象のように思われる。しかし、沖縄の固有語が区別を持っているとなれば、それは九州の錯綜地帯に連続することとなる。また、焦点を近畿地方にしぼってみると、周辺部の区別のある地帯が、中心の区別のない地域を取り巻いているように思えることから、区別する方が古いとも言えそうである。

この問題を真に解決するためには、ナンボ・イクラなどの語形についての陳述副詞的諸用法、接頭辞的なイク～・ナニ～などの諸用法の分布をも平行的な形で言語地理学的に調査することが望ましい。個数と値段の区別に関しては、さらに各地域における貨幣経済の歴史をも参照しなければなるまい。また、各項目全部について言えることであるが、文献国語史学との提携も必要となる。

日本言語地図①付録B

昭和41年3月©

国立国語研究所

東京都北区稻付西山町
電話 東京(03)900-3111(代)

Introduction
to
The Linguistic Atlas of Japan

— Interpretation of the Maps —

Vol. 1

The National Language Research Institute

TOKYO

1966